

# 映画カルテ

ゆひ

## はじめに

---

「読書カルテ」につづき、映画カルテを作りました。  
読書カルテと同じように、「レビュー」だと思って読まないように。

本も映画もそうですが、いつ出会うかによって、印象がずいぶんと変わっていくものです。  
「今」出会えた、と思えたなら、それはとても素敵なことで、  
それが心の一部を作っていくことにもなったりします。

そんな出会いを期待して、本や映画に触れるのでしょうか。

人は、どうでしょうか。  
「今」出会えたと思って、きらきらすることがあります。  
でも、残念ながら、人は同じではいられなくなります。

その変化を受け止め、自分も同じように変わっていくことが、  
お互いの求めるものであったなら、永遠を感じることもできるのかもしれませんが。

そしてときどき、「今」を思い出して、  
優しくなることができるのなら、それは、とても幸せなのだと思います。

そんな記憶とともに、映画もまた、寄り添っているような気がします。

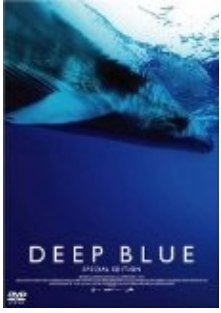
では、処方箋をお渡します。

効果は未知数。

けれど、あなたの心に、「何か」が加わることでしょう。

## DEEP BLUE (2003/イギリス・ドイツ)

---



監督：アラスデア・フォザーギル アンディ・バイヤット

出演：ドキュメンタリー映画

制作：アラスデア・フォザーギル アンディ・バイヤット

200ヶ所というロケ地で7年かけて撮影され、「生きる」ことの意味を強く心に焼き付ける海洋ドキュメンタリー。  
(「Oricon」データベースより)

**海**の中の生き物の生態を追ったドキュメンタリー映画。

迫力がハンパない！

それにしてもなんで深海にいる生物は、

あんなにスケルトンなのだろう。

そして七色に光っている。

自分を光らせることで、暗闇に光を灯してるようだ。

あの色はほんときれいだ。

海の中の弱肉強食は、すごくスピード感がある。

「スイミー」では小さな魚たちが束になって大きな魚に立ち向かうけど、ほんとの海は、その束に大きな魚が襲ってくる。小さな魚は束になりながら、ものすごい速さで逃げる。追う魚も追われる魚も、とてつもないスピードだ。きっと新幹線レベルだろう。

シャチは6時間もクジラを追っていた。ストーカー並の執着心。

僕が海の生物なら、すぐに弱肉強食の中で、真っ先に死んでしまうキャラなんだろうな。

だから、優秀なオスを探しているメスにまで、たどり着かないと思う。

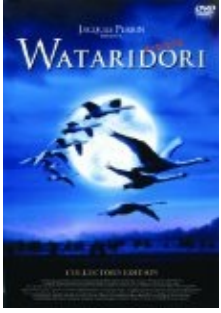
なのに、そんなサバイバルの中で、海に住む生物たちも、ひと時の優雅な時間を楽しんでいたりする。

その時間を楽しめたなら、いいのかな。

人間であってもそれは同じかもしれない。生存競争は絶えずあるけど、ひと時の優雅な時間を逃さないでいたいものだな。

## WATARIDORI (2001/フランス)

---



監督: ジャック・ペラン

それは“必ず戻ってくる”という約束の物語。誰もが果たせなかった<鳥になる夢>。3年に及ぶ撮影期間で世界20ヶ国を口ケし、100種類を超える渡り鳥の壮大なる旅の軌跡を収録した作品。（「Oricon」データベースより）

空が自由なわけじゃない。

渋滞に巻き込まれているとき、  
ああ、この車が飛べたらなあ、なんてことを考える。

それはおそらくみんなが考えていて、  
もしもみんな飛んだとしたら、今度は空が渋滞する。

そしたら今度は下を見て、  
やっぱり地上がいいなあ、考える。

空に浮かんだ車によって、  
鳥はとんだ迷惑だ。

人はいつだって、足りないものことばかり考えている。

この「WATARIDORI」、”渡り鳥”のドキュメンタリーに、  
ペンギンも登場する。  
飛べないけれど、ペンギンも<鳥類>だ。

むかし、「にこにこぶん」でペンギンのピッコロが、  
空を飛ばうと頑張って羽をバタバタさせてるのを、  
じゃじゃまるとポロリがバカにするという、お約束のシーンがあった。

それはやっぱり「足りないもの」に憧れる人間が考えることだ。

だけど映画の中でも、ヒナを鳥に狙われ、抵抗するも奪われてしまい、  
それを嘆くかのように大きな声で親ペンギンは鳴いていた。

もしかしたら、親ペンギンは「飛べたら」と思ったのではないか、  
そんなことをぼくは考えた。

いきものは足りないもののために、命を落とすこともある。

「善悪」ではなく、「事実」があって、  
それでも生き延びるために、鳥は飛び続け、ペンギンは飛ぶのをやめた。

人は、いつだって、足りないものごとを考えている。

空が自由なのではなくて、  
空を飛びたいと思う気持ちに、羽が生えているのだ。

だからこの映画が、存在するのだろう。

## 六月の勝利の歌を忘れない（2002/日本）

---



制作：岩井俊二 茂野直樹

日韓共同開催となった、2002年のワールドカップTMを戦い抜いたサッカー日本代表に密着した長編ドキュメンタリー。

今更ながらこのドキュメンタリーを見ようと思ったのは、松田の元気な姿が映っているから、だけではない。

再確認したかったのだ、自分の心を。

ここに書くのは、せつない感じの小説だったり、まじめな感じの文章だったりする。

それゆえに、きまじめな草食系というイメージを持たれているんじゃないかと、勝手に思っている。

そんなイメージではないよー、という人もいると思うけど、その人がどんなイメージを持っていても、それは、ぼくの一つの側面でしかないわけだ。

人は誰しも、めちゃくちゃ悪くもないし、めちゃくちゃ良い性格でもないはず。

けれど、めちゃくちゃとがってる部分もあれば、めちゃくちゃ暖かい想いも、隠し持っていたりする。

自分はこんな人間です、そうやって紹介できたとしても、それ以外の自分が、ひょっこり出てくる時もある。

目に見える部分だけで、できてはいない。

だからこそ、人には人が必要なのだろう。

ひょっこり出てきた自分も含めて、人がそれを教えてくれたりもするのだから。

そして、再確認の結果。  
やっぱりいまも、心は震える。

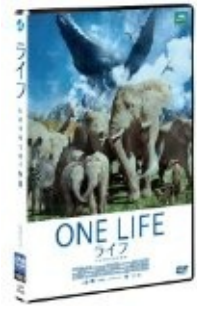
そういう感覚を持っているなら、だいじょうぶだ。

そう思った。



## ライフーいのちをつなぐ物語ー（2011/イギリス）

---



監督：マイク・ガントン、マーサ・ホームズ

製作期間6年、総製作費35億円を掛けて地球上の全大陸でロケを敢行したネイチャー documentary プロジェクト“ライフ”の劇場版。動物と同じ目線で捉えられた驚きの世界が展開。日本語版ナレーターとして松本幸四郎、松たか子が案内人を務める。（「キネマ旬報社データベースより」）

生まれて、食べて、学んで、求愛して、交尾して、次の命をつないで。  
そして、死ぬ。

生き物のサイクルはそれでできていて、  
そこに、迷いはない。

同じ生き物の人間も、  
そのサイクルの中に組み込まれている。

けれど、人間は、死ぬことを恐れるし、  
次の命をつなげない生き方もする。

意味を見つけることに躍起になるのは、  
人間がいつも「迷い」の中にいるからなのか。

と思いつつ、それでも、生き物だって、  
実は「迷い」を抱えてるのかもしれない、とも思う。

たとえば、サルが温泉につかりながら、  
恍惚の表情を浮かべているとき、  
「ここから出たくないな」と本気で思っているかもしれない。

温泉に入れるのは力の強いサルだけで、  
弱いサルはそこに憎しみを覚えているかもしれない。

たとえば沼地にはまった子像を助けようとした、母像が、  
逆に子像を沼地に追いやるふうになってしまうとき、  
「神様、どうかこの子を助けてください」と、  
心の中で、拝み続けているかもしれない。

どうもそんなふうな表情に見えてしまうのは、  
人間の勝手な思い込みなのだろうか。

いいや、きっと「本能」以外に、  
心をつかさどるものが、あるのだ。

と、腕組をしながら観ているなか、  
素敵なコント師に笑わせられることになった。

そいつは、クワガタ。

そのクワガタは、木の上のメスのもとまで、  
木の下からはいあがって、求愛しに行くのだ。

そのメスは、いわば「お姫さま」。

途中には同じように、お姫さまに求愛に行くライバルのクワガタがいて、  
そいつと戦い、投げ飛ばして、上を目指して行く。

その戦いは幾度にもわたり、  
なんどもなんども、ライバルたちを投げ飛ばして、下に落としては、  
やっと、「お姫さま」のもとへと、辿りつく。

お姫さまは、勝ち残ったそのオスと交尾をする。  
オスは興奮したのか、つい、そのメスをさっきまでのライバルと同じように、  
投げ飛ばしてしまうのだ。

投げちゃうんかいっ！

と、思わずつつこんでしまうくらいの、投げっぷり。

そのあと、足を広げて勇ましい勝利？のポーズ。

それは、果して正解なのか。

メスクジラがオスをたちを戦わせて、  
勝者にだけデート権を与えるように、  
生き物の世界（人間を含む）は、女が男を選んでいる。

メスクワガタも、強いオスを選んだはずなのに、  
いささか、そのオスは強すぎた。

ということか。

こんなこと考えている、人間と言う名のぼくは、  
やはり、無駄なことばかりしている存在にも思える。

それでも、動物的なときがあり、  
そのときに、やっぱり「いきもの」だと自覚したりする。

生まれて、食べて、学んで、求愛して、交尾して、次の命をつないで。

あー、いや、まだ、命をつないでいないけれど。

## 笑の大学（2004/日本）

---



監督：星護

出演：役所広司 稲垣吾郎 高橋昌也 小松政夫 石井トミコ

制作：三谷幸喜 三谷幸喜

映像化不可能と言われていた三谷幸喜原作の舞台劇を見事に映画化。戦争間近の昭和15年を舞台に、笑いを憎む検閲官と笑いに命をかける作家のやりとりを描いたコメディ作品。（「Oriconデータベースより」）

三谷幸喜の脚本が好き。

舞台を上映するには、検閲を通らなければならない時代の話。  
検閲官がひとつひとつのせりふに注文をつけ、  
ここはこう変えろとか、こういうせりふを入れろとか、  
脚本家にケチをいれる。  
手直しを加えていくうちにどんどん脚本が面白くなっていく。

今はこのころに比べれば、格段に表現しやすい時代だけれど、  
なんでも思い通りにできることがいいのか考えると、  
それもちょっと違うかなあとも思う。

映画の中のせりふで、

「検閲を無視して、舞台上でせりふを使ってしまうことや、  
検閲で納得できないことと徹底的に闘うこともひとつのやり方かもしれない。  
でも自分は検閲の注文に、ならばもっと笑わせてやろう、もっと面白いものを作ってやろうと、  
そうすることが自分の闘い方だと気づいた」

というようなことを言っていた。

それは三谷幸喜の理想の作家像であるらしいのだが、  
それが最高にかっこいいなあと思った。

不自由の中で、自分の闘い方を知ってるひとは、  
自由を得たときに、きっとその自由を心から謳歌できると思うのだ。

それは不自由だからこそその、もどかしさではなくて、  
不自由な中でも、自由で楽しい心を持っているからだと思う。  
そしてそれはかっこいい。  
素敵な心だ。

たぶんみんな持っていたもの。

忘れずにいられるひとは、素敵だ。

できれば、「笑いのない喜劇」の答えを見せてもらいたかった。  
でももしかしたら、この話自体がそうなのかもしれないし、  
それを考えることがもう、そういうことなのかもしれない。

やっぱりすげーやあ、三谷幸喜。

## ザ・マジックアワー (2008/日本) 喜劇王 (2000/香港)

---



監督：三谷幸喜

出演：佐藤浩市 妻夫木聡 深津絵里 綾瀬はるか 西田敏行

三谷幸喜監督によるコメディ最新作。ギャングのボス・天塩の愛人に手を出してしまったホテルの支配人・備後。天塩に伝説の殺し屋“デラ富樫”を連れて来れば許すとの条件を出された彼は、売れない三流役者・村田に富樫を演じさせることを思い付くが…。(「キネマ旬報社データベースより」)



監督：チャウ・シンチー リー・リクチャー

出演：チャウ・シンチー カレン・モク ジャッキー・チェン

『食神』のチャウ・シンチー主演によるアクション・コメディ。売れない役者が、サクセスしていく様をギャグ満載で描く。共演は『天使の涙』のカレン・モク。

-- 内容 (「DVD NAVIGATOR」データベースより)

―― 日のうちで、世界がもっとも美しく見える時間。

太陽が地平線の向こうに落ちてから、  
光が完全になくなるまでのわずかな時間。

それがマジックアワーなのだそうだ。

そんな三谷幸喜の最新作、「ザ・マジックアワー」。  
売れない役者が、撮影だとだまされ、殺し屋を演じさせられる。

そこから生まれる、絶妙な掛け合い。

笑わせといて、ほろりとさせる。

相変わらず、好きだ。三谷幸喜。

売れない役者が、スパイを演じる、チャウ・シンチーの「喜劇王」。

マジックアワーを観ながら、  
それを思い出したりして。

2時間半くらいの「ザ・マジックアワー」。  
90分の「喜劇王」。

マジックアワーはのんびり各駅停車で外の景色を楽しめる。  
喜劇王は新幹線で、あっという間の風景を見ている感じ。

各駅停車なのに「ドキドキ」した。  
なぜか？  
どこかで人が殺されてしまう場面があると思ったからだ。

でも、その場面がなく、それがすごくうれしかった。  
ギャング映画ありながら、最後まで誰も死ぬことなく、  
映画が終わる。

そういう意味で、暴力的なチャウ・シンチーとは違う、  
満足感があったのだ。

チャウ・シンチーのエンターテインメント性は、すごく好きだけどね。

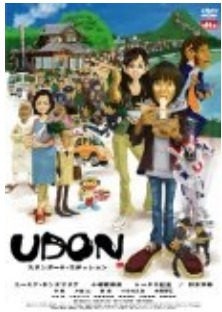
一日のうちで、もっとも美しい時間。

それを見るために、  
がんばってるのが、ぼくらの人生かも。

それは、「ザ・マジックアワー」「喜劇王」、  
両方ともに、散りばめられてると、  
ぼくは感じた。

## UDON (2006/日本)

---



監督: 本広克行

出演: ユースケ・サンタマリア 小西真奈美 トータス松本 升毅 片桐仁

「踊る大捜査戦」シリーズのスタッフが贈る、さぬきうどんの聖地・香川県を舞台にうどん屋の息子が愛すべき仲間たちと共に巻き起こす心温まる感動のストーリー。田舎暮らしに嫌気がさして出て行った香助。しかし、夢半ばで挫折し借金を背負って帰省した彼を待っていたのは、優しい姉、ガンコな親父、友人たち、そして温かい“うどん”だった…。ユースケ・サンタマリア、小西真奈美ほか出演。（「Oricon」データベースより）

ソ ウルフードは、あるか。

大食いの人を見たときに思うのは、  
「あんなに食べられてすごいなー」ではなく、  
「おいしいものをいっぱい食べることができていいなー」  
ということだ。

まあ、満腹になればおいしくはないだろうけど、  
その満腹になるまでまでのキャパティシーが、  
人よりもたくさんあるのだから。

とはいえ、強烈にこれが食べたい！とか、いうことがあまりない。

食べることは、生きることの本質だから、  
食べることにそこまでこだわりがないのは、  
なんだかもったいないような気もしてる。

それは、育った土地や家に、これといったソールフードがないからなのか。

飯どころのひとたちは、  
食に対してこだわりがあるような気がする。

これが食べたい！があるのは、いいことだと思う。

最後の晚餐を聞かれたときは、  
それが出てくるのだろう。

ぼくは全然思いつかないや。

何が食べたいのじゃなく、  
誰と食べたいかのほうが、  
たやすく答えることができる。



その人と食べるごはんなら、  
何であっても、おいしいのだ。

食べられるものならね。

## ミラクル7号 (2008/香港)

---



監督:チャウ・シンチー

出演:チャウ・シンチー キティ・チャン シュー・チャオ

『カンフーハッスル』のチャウ・シンチー監督・脚本・出演で贈る抱腹絶倒のSFコメディ。超が付くほどの貧乏生活を送る父子・ティーとディッキーは、ある日近所のゴミ山で奇妙な緑色の生物を見付けペットとして可愛がるが…。(「キネマ旬報社データベースより」)

## D on't Think Feel !

貧乏親子と宇宙からの謎の使者、「ミラクル7号」。  
「ナナちゃん」と名付けられた、ミラクル7号が、  
貧乏親子に巻き起こす奇跡とは。

チャウ・シンチーは日本の漫画に影響を受けているに違いない。

「食神」は「ミスター味っ子」だし、  
「少林サッカー」は「キャプテン翼」、  
「カンフーハッスル」は、あきらかに「ドラゴンボール」だ。

「ミラクル7号」は「ドラえもん」といったところか。

異論もあると思うけれど、そんな印象。

であるから、ツッコミたくなる要素はたくさんあるのだけど、  
それをいちいち、どうこう言うのはナンセンス。

チャウ・シンチー作品の正しい見方は、  
ただ、観ること。

そして、感じればいいのだ。

そう、まるで漫画を読んでいた子供の頃のようにだ。

笑って、泣いて、心をさらす。

そんな感性が当たり前にあったことを、

大人になっても思い知る。

考えてる暇もなく、勝手に動き出す心。

勝手に動き出した心についていく。  
どこに着くのかもわからずに。

それにわくわくすることがまだ、できるように。

それもぼくには必要だから、  
チャウ・シンチーは外せない。

それにしてもナナちゃん、可愛すぎ。

## インスタント沼 (2009/日本)

---



監督 : 三木聡

出演 : 麻生久美子 風間杜夫 加瀬亮 松坂慶子 相田翔子

『時効警察』の三木聡監督が、麻生久美子をヒロインに迎えて贈る奇想天外なハートフルコメディ。職を失い、男にも振られ人生不連続きのハナメ。ある時、自分が会ったこともない父の存在を知った彼女は彼を訪ねるが、そこにいたのは奇妙な風貌の男で…。(キネマ旬報社データベースより)

も やもやしている、君へ。

「時効警察」は好き。「熱海の捜査官」は好きじゃない。  
「亀は意外と速く泳ぐ」はそこそこ。で、「インスタント沼」は好き。

三木聡(ミッキー)作品は、ツボに入ると、すごくいい。  
そのツボは何かというと、小ボケがいい感じかどうか、  
っていうことかもしれない。

あくまで、個人的な感覚ですが。

いい感じに笑えて、いい感じにすっきり。

蛇口をひねって、水が溢れる間に、  
近くの自販機にダッシュ。  
戻ってきて、水が溢れてなかったら、セーフ。

それだけで、人生の希望が沸いてくる。

そういうのって、必要だね。

やる気スイッチだったり、  
無気力スイッチだったり、  
心のどこかにちりばめられているわけだ。

それをオンにしたり、オフにしたり、  
そういう役割を担う人って、誰にとってもいるわけで。

もやもやしている、その君、  
とりあえず、蛇口をひねってみると、いいかもよ。

## ジャージの二人 (2008/日本)

---



監督：中村義洋

出演：堺雅人 鮎川誠

『チーム・バチスタの栄光』の中村義洋監督が、堺雅人とシーナ&ロケッツの鮎川誠共演で手掛けたコメディドラマ。会社を辞めたばかりの息子とグラビアカメラマンの父。それぞれに悩みを抱えるふたりが、軽井沢の山荘で過ごす夏休みをユーモラスに描く。（「キネマ旬報社データベースより」）

息子、32才、無職。  
妻はよその男と恋愛中。

父、54才、グラビアカメラマン。  
三度目の結婚にも黄色信号。

訳あり親子の何もしない夏休み。

前に、何かで耳にしたり、目にした言葉があります。  
それは、はっきり覚えていないのだけれど、  
確かこんな感じの言葉。

「別に伝えたいことなんてなくてもいいじゃねえか」

どんな場面で、どんなふうな流れだったか忘れたけれど、  
その言葉は、そのとき、大事だなあと思ったのを覚えています。

日常には、  
伝えたいことがあふれかえっているようなときもあれば、  
伝えたいことがなくて、困ったなあというときもあります。

伝えたいことがあふれるのを知っていると、  
伝えたいことがないとき、思わず自分が“なにもない”という錯覚になったりします。

でも、“なにもない”ってときも、必要だし、  
なにもないことで、気張っていた心が、救われるときもあるわけです。

というか、なにもないと思うときの方が、日常的ですらあるかもしれません。

だから、何もなくて、何も伝えることがなくても、  
それでいいのだと思います。

そうは思っても、この映画を見たらやっぱり伝えたくなくなっていました。

それは、堺雅人の出てる映画が好きだということです。

あー、伝えてしました。

何も伝えることのない文章を書くのは、至難の業です。

きっと、メールも電話も、  
誰かと繋がる時には、伝えてしまうものなのでしょう。

裏を返せば、伝えたいことがあるから、繋がるということなのでしょう。

人はやっぱり、何かをしてしまう生き物なのです。

そして、愛のある生き物なのです。

## ステキな金縛り (2011/日本)

---



監督：三谷幸喜

出演：深津絵里 西田敏行 阿部寛 竹内結子 浅野忠信

殺人事件の証人はただ一人...落ち武者の幽霊。今、全世界注目の裁判が、幕を開けるー!国民的脚本家としてエンターテインメント界を牽引する三谷幸喜監督作品!深津絵里、西田敏行ほか豪華俳優陣が集結! (「Oricon」データベースより)

三谷祭りの影響か、  
全然ヒットしなかったドラマ「総理と呼ばないで」がレンタル入荷していた。

低視聴率だったらしいけど、  
ぼくは当時このドラマが大好きだったので、  
小躍りして借りたいのだった。

「合言葉は勇気」もレンタル入荷されなかと、待ちわびている。  
これもヒットしていないのだけど。

そんな勢いも手伝って、新作の「ステキな金縛り」を観てきた。

映画としては、「ザ・マジックアワー」と「THE 有頂天ホテル」のほうが好き。

どちらかというと、  
三谷幸喜脚本の初期の映画の感覚に近い。

「ラジオの時間」とか「龍馬の妻とその夫と愛人」とか「笑いの大学」とかと同様、  
舞台作品という感じがする。  
それらよりも、ハイテンポな笑いは多いけれど。

そのハイテンポな笑いの割には、  
流れがぶつ切りに思えた。

いつもなら、笑いの中から、  
少しずつ泣ける感覚に自然に陥っていくのに、  
その流れが、ぼくの中ではうまく呼応せず。

うーん、ぼくとしては、最高傑作とはならず。

けれど、それも「面白い」という前提があった上でのこと。  
期待値が大きいぶん、物足りなかったのかなあと、分析しています。

あ、久しぶりに、ちゃんとレビューしたなあ (笑)

## リトル・ミス・サンシャイン (2006/アメリカ)

---



監督: ジョナサン・デイトン ヴァレリー・ファリス

出演: アビゲイル・ブレスリン グレグ・キニア ポール・ダノ アラン・アーキン トニ・コレット

アカデミー賞4部門にノミネート!落ちこぼれ家族の奇妙の旅を描いたハートフル・ムービー!なんともブサイクでおデブちゃんな少女・オリーブが、ひょんなことから全米美少女コンテストの地区代表に選ばれた。それぞれ問題を抱える落ちこぼれ一家が、黄色のオンボロ車に乗り、決戦の地カリフォルニアを目指すことに…。(「Oricon」データベースより)

泣こうと思っていなかったのに、  
不意をつかれて涙が出てしまう。

笑おうと思ってないのに、  
知らぬうちに、笑みがこぼれている。

そんな映画が好きだ。

わりに、家族愛を描いたものに、  
そうなる傾向が強い。

それぞれに問題を抱えた、バラバラの家族が、  
娘のミスコン出場のために、壊れたバスに乗って、  
1000キロ以上の道のりをひた走る。

いわゆるロードムービー。  
その道のりの中で起こる「ドタバタ」は、  
人生っていう一つのロードだ。

家族っていうのは、多少の差異はあろうとも、  
壊れたバスに乗っているようなものかもな、と思う。

速度は落とせないわ、30キロ以上にならないとギアが入らないわ、  
クラクションは鳴りっぱなしだわ、ドアは壊れるわ……

それでも、必死になってそのバスに乗り込んで、  
ぶつかりあいながらも、走っていく様。

他人からみたら滑稽だけど、  
その滑稽さは、どこか愛しいものようにさえ見えてしまう。

子供を想う親の気持ちは、  
本当の意味では僕はまだわからないけれど、  
ああ、たぶん、こうやっているんな「ドタバタ」から、  
守ろうとするんだらうな、と思ったら、泣けてきた。



そのやり方が、いいとかダメだとかじゃなく。

笑わせようとしてる感じが無いのに、笑ってしまい、  
泣かそうとしている感じもないのに、泣けてくる。

そんな雰囲気もまた、家族という名のバスのよう。

久しぶりに、満点な映画。

あー、観てよかった！

## つむじ風食堂の夜 (2009/日本)

---



監督: 篠原哲雄

出演: 八嶋智人 月船さらら 下條アトム スネオヘアー 芹澤興人

制作: 吉田篤弘 久保裕章

吉田篤弘のロングセラー小説を実写映画化! オール北海道ロケで“ちょっと不思議な日常”をノスタルジックに描いた、大人の為のハートウォーミング・ファンタジー。ある夜、私はつむじ風食堂に足を踏み入れた。そこには毎夜、古本屋、果物屋の青年、帽子屋、舞台女優といった風変わりな常連客が集う。気後れしつつも、いつしか常連客になっていく私だったが…。八嶋智人、月船さらら、下條アトム、スネオヘアー、生瀬勝久ほか出演。

自分にとって、価値のあるものと、  
他人にとって、価値のあるものは、違うわけで。

唐辛子の伝説から、  
宇宙の果てに至るまで、  
「価値」は、それぞれの心の中で決まっていく。

そうやって人と人は、  
いつのまにか自分だけの価値を交換したり、  
分けあったりしながら、心を少しずつ変えていくってわけだ。

特別にドラマチックなことが起こるわけでもなく、  
それでも、心の深い根の部分でそれぞれがぶつかるとき、  
静かにその変化におどろき、また、心地よく感じたりする。

それは、なんというか、  
大人になってよかったなと思う瞬間のひとつだ。

帽子屋に言わせると、  
それは年をとった証拠でもあるのだけど。

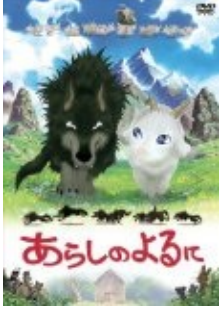
でも、生きている限り年は取り続けるのだから、  
そんな瞬間があるってことは、いいことだ。

日常が、日常でありつつも、  
人が人に影響しあって、日々を紡いでいること。

それはいつだって、目には見えない、ドラマチックな現象だ、  
と、大人の僕は思うのであった。

## あらしのよるに (2005/日本)

---



監督: 杉井ギサブロー

出演: 中村獅童 成宮寛貴 竹内力 山寺宏一 林家正蔵(九代目)

制作: きむらゆういち

きむらゆういち原作のベストセラー絵本を、主演声優に中村獅童と成宮寛貴を配して映画化したハートフルアニメ。嵐の夜に真っ暗闇の山小屋で出会ったオオカミのカブとヤギのメイ。お互いの正体を知らないまま心を通わせた二匹は再会を誓い合うが…。(「キネマ旬報社データベースより」)

**映** 画館で泣いたのは、とても久しぶりのような気がする。

いや、もしかしたら、あれほどこらえきれなくなったのは、初めてかもしれない。

狼のカブは、ヤギのメイをとても食べたいけれど、友達になってしまったから、食べることができない。けども、空腹で食べたくてしょうがない。けども、友達。カブはその葛藤の中、メイを失うことを嫌がり、ひたすらにメイを思いやり、メイを助け続ける。雪山で遭難しそうなおとき、メイは「自分を食べて」と言う。命をかけて守りたい友達がカブであるからだ。カブも命をかけて守りたいメイのために、優しいうそをついて、メイのえさを探す。

ふたりはただ守りたいもののために、それが自分にとって必要であるからというだけで、相手を深く思うことができる。「僕を食べて」と言ったメイを食べることも、優しさなのかもしれない。でも食べなかったことも、優しさだろう。信頼でつながっているから、選んだ答えはどれであろうと、優しさで結ばれるはずだ。

「あらしのよるに 恋愛論」という関連本を見かけたが、ああ、確かにこの映画は純愛映画だなあと思う。ロミオとジュリエットのような秘密で禁断の愛でもあり、やりたい女がいるけど、友達だからやれない、やったら友達関係は終わってしまう、そんな信頼関係の愛でもあるかもしれない。

そんな気持ちは男じゃないとわからないと思うが、  
ガブがそれをがまんすることに、盛大な拍手を送ってやりたいくらいだ。

などと不純な見方もできるが、  
映画を見終わった後、途中で思い出し、また泣きそうになるくらい、  
ガブは優しく、優しく、  
メイは男だけど女のようで、優しく、ずるくて...  
優しくなりたいなあって、なんか胸がギュッとになってしまうのだった。

あれは慈愛だろう。  
「慈しむ」ということは、そういうことなんだろう。

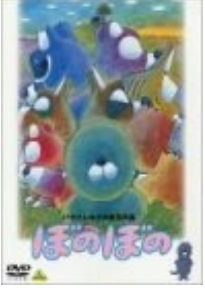
ところで、原作は絵本なんだけど、読んだことがありません。  
また違う感じなのかもしれないけど、  
絵本も読んでみたくなりました。

僕が子供なら、何を思うんだろう。  
大人の僕とは違うことを思うだろう。  
それも知ってみたい。

大人になったと僕は思った。  
おとなになったと、ちいさな僕も思うだろうか。

## ぼのぼの (1993/日本)

---



監督: いがらしみきお

原作者・いがらしみきお自らが映画化した“見るだけで幸せになれる映画”。音楽をゴンチチ、EDテーマを大沢誉志幸が担当し、声優としてサザンオールスターズの関口和之らが参加。（「Oriconデータベースより」）

# 当

たり前のことを不思議と思っていた時間が僕にはあったっけ？

それがあったとしても、僕は確実に忘れてる。

二作目の「ぼのぼの〜クモモの木のこと」で、スナドリネコさんは言った。

”どうしてみんな忘れたがるんだろうな。できれば思い出したいよ。  
生まれた時、手や足を動かして、どんなに楽しかったかを。  
それを思い出せたら、何があっても大丈夫な気がしないか”

当たり前なのが不思議だったのはずの時間が、あったんだろうか。  
僕はやっぱり忘れてる。  
それがなんだかくやしくて、不思議に思うようにしてる。  
でもそれはニセモノで、思おうとしている自分を演じてるだけなのだ。

この劇場版「ぼのぼの」でも、その当たり前の不思議さをぼのぼのは知っていて、  
”楽しいことはどうして終わっちゃうの？”と、何度も何度も聞くのだった。

その答えを、スナドリネコさんは知っていた。  
その答えは、当たり前のことだった。  
でもそれを言葉にすると、終わることは愛しいことかもしれないと思えたのだ。

”生き物には、ただ見ているしかできないときがある。  
そのときは、ちゃんと見なくちゃいけない”

”何かのために生きてはいけない”

”生き物は見るために生まれてきた”

”本当に大変なときなんてないんだよ”

心に入るたくさんの言葉。  
言葉にしないそこにある心の景色。  
それが僕にはとても心地いい。

で、楽しいことがどうして終わるかって言うと、

...それは秘密です。

## おもひでぼろぼろ（1991/日本）

---



監督：高畑勲

都会生活に物足りなさを感じている27歳のヒロインが、憧れの田舎を旅する中、その自然の素晴らしさや人々の心の温かさに触れ、成長していく様を描いた高畑勲監督が贈る感動のアニメ。声の出演は今井美樹、柳葉敏郎ほか。（「Oriconデータベースより」）

「晴れの日とくもりの日と、雨と...どれがいちばん好き？」

「...くもりの日」  
「いっしょだ！」

ずいぶん前に買った「おもひでぼろぼろ」。

ここに描かれる主人公のタエ子の気持ち、よくわかる。  
でもわからないところがあって。  
それが冒頭の会話だ。

タエ子のことが好きだと噂になってしまった男の子との会話。  
このシーンを見るたびに、どうして「くもり」が好きなのだろうと考えてしまう。

そんなことをかつて恋人に言ったら、彼女は、  
「曇りの日は、どっちにもなれるからじゃない？雨にも晴れにも」  
とっていた。

なるほど～って思ったのだが、  
やっぱり今でも考えてしまうのだ。

曇りの日って、空が心を後押ししてくれない。  
晴れなら、外に出ようって気にさせてくれるし、  
雨なら今日はやめておこうっていう気持ちになりやすい。

でも曇りの日は判断しかねるのだ。

発想を変えてみようか。

曇りの日はいちばん自由なのかもしれない。  
空に背中を押されることなく、  
それをいいわけにすることなく、  
自分の意志で決められる天気。

晴れてほしいと思いながら、  
雨降らないかなあって思いながら、  
自由に自然に過ごしている天気。

もう恋人ではない彼女が言ったことの意味は、  
そういうことだったのだろうか。

で、僕はどんな日が好きなんだろう？

う～ん...



## 秒速5センチメートル（2007/日本）

---



監督：新海誠

出演：水橋研二 近藤好美 尾上綾華 花村怜美 制作：

新海誠

『雲のむこう、約束の場所』の新海誠が手掛けた連作アニメ。小学校の卒業と同時に離ればなれになった遠野貴樹と篠原明里。大雪の降るある日、ついに貴樹は明里に会いに行く決心をする。「桜花抄」「コスモナウト」「秒速5センチメートル」を収録。（「キネマ旬報社データベースより」）

センチメートルとは、センチメンタルの仲間なのだろうか。

たとえば人を想う気持ちだけで、逢いに行ってしまう事。  
たとえば届かない人を想い続け、あきらめる事。  
たとえば“あのときの未来”ではない今に、未来を見つけれない事。

きっとそういうこと。

秒速5センチメートルで落ちていく桜の花びらのように、  
青春と知らずに過ごした時間は、やがて心の奥に横たわる。

そして、センチメートルは、センチメンタルにすりかわっていたのだった。

「初恋」が叶うことって、どれくらいあるんだろうか。  
初恋を、ちゃんと相手の気持ちと交換し合えたひとが、  
ぼくはうらやましい。

たとえ、その先に、現実が待っているとしても、だ。

ぼくは想い続け、泣き、あきらめる。  
思春期の恋は、その繰り返しで、いい思い出はないから。

それでも不器用なカッコワルイ青春を、きっと送った。  
美しくもなんともない世界が、今では強い光を放つ。

それに気がついたのは、おとなになった証拠なのだ。

と、あまりに詩的に書きすぎてるのは、  
まるで「北の国から」の純のように、  
このアニメの登場人物が想いを独白するからだ。

ぼくもそんな気になって、  
思わず想いだけを吐いているのだ。

想いは届くのだろうか。

メールを1000回やりとりしても、  
心は1センチくらいしか近づかなかった。

そんなおとなになったぼくの、  
おとなになりきれない部分の言葉とかも。

もう初恋が叶わないとしたら、  
ぼくは言ってやろうと思う。

ぼくが誰かと結婚するとき、  
その人がぼくの初恋なんだよって。

そしたら、そのときのあなたは、  
笑ってちょっと照れてください。

そんなぼくでよかったと、  
そんなあなたでよかったと、

そんなふたりでいましょう。

## MAJOR ~友情の一球~ (2009/日本)

---



監督：加戸誉夫

出演：くまいもとこ 森久保祥太郎 大浦冬華 釘宮理恵 笹本優子

制作：高見明男 満田拓也 土屋理敬

満田拓也原作による人気野球アニメの劇場版。プロ野球選手の父・英毅の移籍により博多へ転校することになった吾郎は、肩の怪我を心配する両親からの「投球禁止」という条件を受け入れて名門・博多南リトルに入団。チーム一丸となって九州大会に臨む。（「キネマ旬報社データベースより」）

**映**画館には、子供しかいなかった。

子供のころを思い出すのではなく、  
かといって、大人の目線で見守るのでもない。

ただ夢中になる。

そう、ただ夢中になって、  
いつのまにか泣いているのだ。

いま、最も泣ける漫画であり、アニメであり、映画。

それは僕が野球少年だったからだけではない。

抱えるものの大きさと、  
それを分け合っていく優しさが、  
どれだけ胸に沁みこむことか。

好きなことのために、  
好きなもののために、  
好きな人のために、

世界は愛で満ちていると、  
感じずにはられない。

## サマーウォーズ (2009/日本)

---



監督: 細田守

出演: 神木隆之介 桜庭ななみ 谷村美月 斎藤歩 横川貴大

制作: 貞本義行 マッドハウス 奥寺佐渡子

『時をかける少女』の細田守監督によるSF青春アニメ。仮想空間OZが人々に浸透した近未来。先輩の夏希に頼まれ、彼女の実家を訪れた高校生の健二は、個性的な家族に振り回される中、謎の数字が書かれたメールを受信し…。(「キネマ旬報社データベースより」)

ありえるよな。

夢を見て起きた朝、「夢かぁ」と思わず口にしてしまうときがある。きっと「夢」だと気が付かずに、夢の中の世界を過ごしたからだ。

でも実は「夢」だと思ってた側が「現実」で、起きた朝は、実は「夢の中」だったりはないだろうか。

って、ちょっとわかりにくい？

おーなり由子さんの「てのひら童話」という短編集で、夢の中の自分と、現実の自分を交換するという話がある。

交換し合ってるうちに、今が夢の中なのか、現実なのかわからなくなる、という話だ。

実はこのネット上の世界は、そういうものに近いと思ったりする。

ネット環境が進化すれば進化するほど、自分の生活の「リアル」が現実にもネットにも存在することになる。

それは暮らしを豊かにしてくれるものではあるけれど、そこに境目があることを意識していないと、世界が壊れることは、ありえる。

それはもう、人の手では負えないほどに大きな力になってしまうことも。

「サマーウォーズ」はそういう意味でリアルだ。

でもきっと、そういうことを伝えたい映画ではないんだろう。

それは1つの側面しかすぎなくて、  
それを通じて伝えたいのは、人と人との関係、  
絆やコミュニケーションというものが、世界をつなぐ本当のことだ、と。

ぼくにはそんなふうなメッセージが伝わった。

そして、やっぱり「世界を救う男」ってのは、  
それっぽくオーガナイズされてなくても、  
かっこいいんだなあと、思う。

ヒーローになりたいね。

小さな世界でいいから、  
ぼくが放つ想いで、世界を救ってみたい。

そんな少年ぼさが胸の中で、音を立ててうずいたよ。

## 豆腐小僧（2011/日本）

---



監督：杉井ギサブロー

出演：深田恭子 武田鉄矢 小池徹平 大泉洋 宮迫博之

京極夏彦の原作小説を、声優に深田恭子、武田鉄矢ほか人気俳優を迎えてアニメ化。人間と妖怪が共に暮らしていた江戸時代から現代の日本にタイムスリップしてしまった、人間を怖がらせることが苦手な泣き虫の妖怪・豆腐小僧の冒険を描く。（「キネマ旬報社データベースより」）

人を怖がらせるのが苦手な、妖怪、豆腐小僧。

豆腐小僧の願いは、消えたおっかさんに会いに行くこと。

たいてい、会いに行きたいのは「おっかさん」なんだよね。  
母親への無条件の慕情は世界共通だろうと思う。  
父親はたいてい、せつないものだ。  
その父親も「母親」を想うのだから、同じことなただけけど。

リリー・フランキーの絵本「おでんくん」も、  
おかあさんに会いたがっていたことを思い出して、  
それと重なったり。

そんななか、「アイ」という女の子が、  
人を怖がらせることができない豆腐小僧に言う台詞。

「豆腐ちゃんには、豆腐ちゃんの役割がきっとあるよ」

役割。

それがわかることが、  
純粋な幸せなんじゃないかと思ったりする。

人生に悩む時の、本質的な部分は、  
自分が何者かってとこにあるような気がするから。

それが、わかったときに、  
人生はそれまでと違ったベクトルで進み始める。

それはこの映画で言うと、  
豆腐小僧は豆腐を取られると消えてしまうのだけれど、  
それを死神に差し出してまでも、守り抜こうと思う存在がいること。

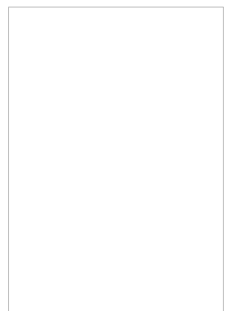
自分の決めたその役割は、  
自分を、幸せにする。

なんてことを、感じたのです。

あ、父親はせつないと言ったけれど、  
ちゃんと父親の活躍もあるところが、  
よかったなあと、男の僕は思います。

## 星を追う子ども（2011/日本）

---



監督：新海誠

出演：金元寿子 入野自由 井上和彦

「ほしのこえ」「秒速5センチメートル」の新海誠が贈る、本格ジュブナイル・アニメーション!地下世界アガルタから来たシュンと出会ったアスナ。心を通わせるも、シュンは姿を消してしまう。そしてアスナの前に現れたシュンと瓜二つのシン、妻との再会を切望する教師・モリサキ。それぞれの想いを胸に、3人はアガルタへと向かう。 (「Oricon」データベースより)

"そして君のいない この世界にHello"

僕は、「ドラクエ」とか「F.F」とかの世代なのだけど、基本的にRPGには、まったくハマらなかった。

ハマってたゲームといえば、スポーツ、シミュレーション、あとは「桃鉄」とか。(ちなみに、「ストII」にも、まったくハマらず)

去年放送していた「勇者ヨシヒコと魔王の城」という、ドラクエ実写版のドラマは、毎回腹を抱えて見ていたけれど。

それでも「秒速5センチメートル」で、新海誠作品にズキズキした僕は、このRPG要素の強い「星を追う子ども」にも、ズキズキさせられた。

この映画のキャッチコピーでもある、"さよならを知るための旅"。

それは人が生きていくうえで、どこかで必ず会うことになる、「喪失」と、どう向き合っていくのか、ということ。

人の体は、誰も1つの個体であって、誰かと永遠に同じものになることができない。

手をつないだり、キスをしたり、抱きあったりするたびに、1つの個体が、重なり合っているのを、思い知る。

そして、いつか、一人で死んでいく。

1つの個体の生きものは、みんなそうなのだ。



だから、必ずどこかで「喪失」と出会う。  
たとえそれが、「死」という形でなくても、  
重なり合った想いが離れるとき、それは同じくらいの「喪失」だ。

人生には、そうやってたびたび、喪失が訪れる。

それでも、今、体があるなら、心があるなら、  
その命を生きていくことは、とても大切なことだ。

今、生きているならそれは、  
そのための役目が、まだ残されているということだと思うから。

それにしても、RPGって、人気あるよなあ。

どこかで「人生はRPGだ」というフレーズを耳にしたことがある。

確かに、仲間を集めて、敵と戦って、町で休んだり、話を聞いたり、  
呪文を覚えたり、結婚したりもできたっけ？  
そうやって、レベルをどんどん上げて成長していくのは、  
人生のようだと思うけど。

でも、人生にはリセットボタンはないし、  
死んでも、復活の呪文はない。

「喪失」を抱えながら、それでも生きていく。  
また新しい想いと、生きてきた優しさに出会うために。

RPG要素は強くても、  
そんな"さよならを知るための旅"が描かれているから、  
また新海誠作品に、ズキズキとしたのだろう。

でも次回作は「秒速5センチメートル」のような、  
現実の描写を、あの圧倒的なビジュアルの美しさで描いてほしいなあ。

## コクリコ坂から (2011/日本)

---



監督：宮崎吾朗

スタジオジブリと宮崎吾朗監督が、親子2世代にわたる青春を描いた長編アニメ。太平洋戦争が終わって18年。明治に建てられた歴史と思い出の詰まった高校をめぐり、小さな紛争が起こる。そんな中、ある高校生の男女が心を通わせ助け合っていく。（「キネマ旬報社データベースより」）

世の中、昭和回帰しすぎだ、  
と思うのは僕だけでしょうか。

そのころを生きた人は、ノスタルジーを、  
そのころを知らない人は、新鮮さを、  
そんな感じが悪いとは思わないけれど。

前提にあってほしいのは、  
「今も素敵だけれど」ってこと。

今が嫌だから、ノスタルジックになったり、  
昔の方がいいかもと、ときめいたりするのは違うと思うのだ。

思い出したのは、しんちゃん映画の「オトナ帝国の逆襲」。  
オトナが懐かしさでいっぱいになる町で、しんちゃんが放つセリフ。  
家族ともっと一緒にいたい、そして、

「オラ、大人になりたいから！」

懐かしさなんかより、今を生きたい、未来を信じたい。

それが宝物になって、いつか「今」の目の前に現れる。  
そのとき、人は大人になるのだろうか。

「コクリコ坂から」は、昭和回帰の物語ではない。  
（散々、昭和回帰の話をしておいて！と思うかもしれませんが）

ただの初恋、ただの青春、それだけ。

時代の流れがどれだけ複雑に絡み合っていると、  
人は必ず青春を通りすぎるっていうこと。

そうであってよかった、そうであることで、すごく安心する。

それは昭和だろうが平成であろうが、  
ちゃんと訪れるものだってこと。

青春の真ん中では、抱えきれないぐちゃぐちゃが心にあるのに、  
それを羨むときがくるなんて、人っておかしいものだな。

でも、それが素敵なところでもあるかもな。

そんなことを考えたのでした。

## Friends もののけ島のナキ (2011/日本)

---



監督:山崎 貴 八木竜一

出演:香取慎吾 山寺宏一 YOU 加藤清史郎 FROGMAN

雲に隠された海の先には、もののけが住むとおそれられ、近づくことさえ禁じられた不気味な島があった。ある日、そこに迷いこんだ人間の赤ん坊・コタケは不思議なもののけたちに出会ってしまう。突然現れたコタケを覩て、もののけたちは大パニック！実はもののけたちも人間におびえて暮らしていたのだ。そこで暴れん坊の赤おに・ナキと青おに・グンジョーがコタケの面倒をみるようになった。はじめはケンカばかりのナキとコタケだったが、一緒に暮らしているうちに、ナキの心の中には優しい気持ちが芽生えてくる。そして、ふたりはかけがえのない“ともだち”になっていく。だが、どんなに仲良くなっても、もののけと人間はずっと一緒にいることはできない。やがて悲しい別れの日が訪れる。しかし、その先には驚くべき感動の結末が待っていた一。

人はわからないものが怖い。

そのことが、自分を壊す可能性も持っているから。

だから、勝手に誤解する。  
そうして都合のいいように、  
自分が壊れないように、守ったり、攻撃したりする。

人間同士でも、そうだ。

「わからないもの」が怖いから、  
わかろうとするまえに、答えを作り上げたりしてしまう。

そうやって誰かが誰かをちょっとずつ嫌いになって、  
ちょっとずつの争いが大きくなっていく。

誤解が元であってもだ。

僕は二十代半ばまで、  
なるべく自分と似ている感じの人といたいと思っていた。  
実際、似ている人といると安心したし、  
そういう人を見つける力が研ぎ澄まされていたと思う。

けれどそれは同時に、  
「わからない人」に自分を壊されるのが怖かったから、とも言える。  
自分と似たものによって、守られていたのだ、きっと。

そのあと、それ自体を壊した出逢い、というのがあった。  
つまり、自分の価値観と、あまり似ていない人との出逢いだ。

それ以前の僕なら、そういう出逢いを、「無いもの」にしたはずだ。

けれど、そのとき「無いもの」にしなかったのは、  
怖さよりも、「知りたい」気持ちが多くあったからなのだと思う。  
「知りたい」という気持ちの中には、愛がある。  
だから、似ていない価値観によってぶつかりあっても、  
むしろ、ぶつかりあったことで、生まれる絆や想いがあった。  
そういうことを、学んだんだと、今は思う。

そして、そもそも価値観の違い、と思っていたことは、  
本当はそうではなくて「表現の違い」だった、ということもあった。

「わからない人」だったことは、  
わかっていくことへの道筋だと覚えた。  
それは僕自身が、今まで知らなかった自分をわかっていく、  
とうことでもあったのだ。

誰かが誰かのことをちょっとだけ嫌になって、  
世界が「わかろうとすること」をやめるなら、  
世界は自分勝手に滅びていく。

「泣いた赤おに」が原案のこの映画が、  
そのことを教えてくれているような気がする。

もし結婚して子供ができたなら、  
「100万回いきたねこ」とともに、  
「泣いた赤おに」も、読み聞かせたい。

成長したときに、その物語が、  
その子の想いを、後押ししてくれるように。

世界と自分を、滅ぼすことがないように。

## ももへの手紙 (2012/日本)

---



監督: 沖浦啓之

出演: 美山加恋 優香 西田敏行

豊かな自然と優しい人々が生きる瀬戸内の小さな島を舞台に、少女に訪れる不思議な日々を描いた家族の愛の物語。  
(「Oricon」データベースより)

「ももへ」

そう書きだしたけれど、  
思いやるほどに、言葉にできない父親の手紙。  
それを残したまま、父親は亡くなってしまふ。

その手紙を大切にする、もも。

夫を失った悲しみを抱えつつ、  
気丈にふるまう、ももの母。

母親の実家である島に母娘は身を寄せ、  
ももは、そこで妖怪と出会うことになる。  
妖怪は、「ソラ」にのぼる途中の父親の代わりに、  
母娘の様子を見守る役目があったのだ。

という話を観ながら、ふっと沖縄の離島にいたときのことを思い出した。

それは、僕と年の近いシングルマザーの女性と、  
一緒に働いていたときのこと。

彼女には3人の子供がいて、  
いちばん上の娘さんは、高校生だった。

飲み会でカラオケにいくと、  
その娘さんも付いてきて、  
母娘でダイエットをした。

その歌はKiroroの「未来へ」だった。

僕はその彼女の身の上話を、  
それほど聞いたわけではないのだけれど、  
「未来へ」を歌う、母娘に、思わず涙してしまった。

まあ、当人たちは、楽しそうに飄々としていたので、  
僕が勝手にじーんとしてしまっただけなのだけど。

そんな光景が、鮮やかに蘇ってきたわけで。

彼女らにも映画にも、ぐっと心に迫ったのは、  
何かを失いながら、でも、  
共に生きていくっていうことを、感じさせる絆だ。

そういう絆を僕は持っていないくて（たぶん）、  
時折、それが羨ましいと思ったりする。

羨ましいなんて、思われる方は、本望ではないと思うけれど、  
そういう感覚、というのが、確かにある。

それでも、誰も人と比べることもない、  
自分の中のダメージっていうのがあって、  
それと対峙しながら、人は生きているわけで。

書きだした手紙の続きを書けない自分もまたいて、  
もしかしたら、それは、  
それだけの想いがあるってことなのかな、とも思う。

そんなふうに、いろんな気持ちが動く人生は、悪くない。

感じて、動く。動いて、感じる。

それが「感動」ってことだから。

あ、下ネタじゃないですから。  
それも感動的ではあるけれど。

あ、脱線。

とにかく、僕を感動させたかったら、  
母娘で「未来へ」を歌うことです。

まとめると、そんな映画です。

## クレヨンしんちゃん 嵐を呼ぶ! オラと宇宙のプリンセス (2012/日本)

---



監督: 増井壮一

出演: 矢島晶子 ならはしみき 藤原啓治

主人公・しんのすけがシリーズ史上初めて地球を飛び出し宇宙スケールで活躍する、「映画 クレヨンしんちゃん」シリーズ20周年記念作品。妹のひまわりがヒマワリ星の姫にならないければ、地球もヒマワリ星も消滅する。それを知らされたしんのすけは...。(「キネマ旬報社データベースより」)

安易に、古き良き思い出に浸ることに、NOを突き付けた「オトナ帝国の逆襲」という作品が、しんちゃん映画のマイフェイバリット。

だったのだけど、もしかしたら、これは、2位の「ブタのヒヅメ大作戦」を抜いて、オトナ帝国と1、2を争う作品になったかもしれない。

しんちゃん映画のほとんどで、泣いてしまうのだけど、これは、本当にいい作品だ。

地球の兄弟星である、「ヒマワリ星」は、地球に「ヒマ」を送り続けることによって、宇宙のバランスを保っている。

ところが、その「ヒマ」が足りなくなり、地球には争い事が絶えなくなる。

その「ヒマ」を作り出すことができるのが、しんちゃんの妹の「ひまわり」で、そのひまわりを、地球と太陽系の存続のために、「ヒマワリ星」の姫として、迎え入れる。

ひまわりは「ヒマワリ星」のものとなり、家族でさえ、ひまわりに近付けなくなってしまう。

野原家は、宇宙の存続という問題を理解しつつ、ひまわりと地球と一緒に暮らすために、ひまわりを奪還するために立ちあがる。

オトナ帝国の、ひろしが、家族を持つまでの回想のシーンは号泣ものなのだけど、この作品もまた、回想から続く「想い」のシーンに涙があふれる。

今回は過去の回想ではなく、「未来への想い」だ。

ひまわりの成長する姿を見守っていきたいという、



強い想いが、ひろしを復活させるのだ。

そして、地球と妹とどちらかを選べ、と聞かれたときの、しんちゃんの答え。

「どっちも大切だゾ！」

大事なプリンを、ひまわりに食べられてしまって、「妹なんていない！」と言ってしまったことへの後悔が、このセリフを、より泣けるものにする。

しんちゃんの「お兄ちゃん」としての振る舞いが、ここに全部凝縮されている気がする。

物事はバランスで成り立っているものだけれど、そのバランスが崩れることも恐れないで、愛するものを、ただ愛すると決意するときの、野原一家には、毎度毎度、号泣だ。

そして、おバカなふうに見せて、社会的な（あるいは、壮大な？）設定の作風が、相変わらず、すごい。

だけどいつも、大切なのは、家族を愛する力だということ。

素晴らしい。  
本当に素晴らしい。

シロの影が薄かったことが、ちょっとだけ淋しかったけれど。

それは、またこんど、かな。

## おおかみこどもの雨と雪（2012/日本）

---



監督：細田守

出演：宮崎あおい 大沢たかお 菅原文太

国内外から注目を集める細田守監督が手掛けた劇場長編アニメ。「人間とおおかみ」のふたつの顔を持つ“おおかみこども”の母となった女性と子供たちの成長と絆を描く。宮崎あおい、大沢たかお、麻生久美子、菅原文太ら豪華俳優陣が声優を担当。（「キネマ旬報社」データベースより）

以前、「子育ては、二度目の人生を送ること」という言葉を耳にした。

こどもは、初めての出来事とともに、育っていく。  
初めてだから、それが「怖い」とも「楽しい」とも感じる。  
たくさんの選択を繰り返して、やがて自分の世界を見つける。

自分の世界を見つけたはずのおとなも、  
親になるとき、また「初めて」がやってくる。

そうだ、親になること、子供を育てること、  
それ自体が、「初めてのこと」なのだ。

初めてのことに、戸惑ったり、疲れたりすることは、当たり前のこと。

だって、マニュアルなんてなくて、  
こどもそのものの取り扱いすら、一人一人違うわけだ。

違うからって、わからないからって、放り出さない。  
もうきっとそれは、本能なんじゃないだろうか。

たくさんの「初めて」に出会って、  
怖い、楽しい、悲しい、うれしい、を、  
繰り返すこどもと同じように、  
親もきっとたくさんの「初めて」を迎える。

怖くても、悲しくても、つらくても、疲れても、  
なんとかやってこうとする力が、人にはきっとあるのだ。

人生は1度だけだけど、こどもとともに過ごす時間は、  
それまでの自分の人生ともつながった、「二度目の人生」でもあるのかもしれない。

あ、そういえば、宮崎あおいが主人公の「花」の声をやっている。

これはアニメーションだけど、  
宮崎あおいは「良い嫁」の役をやる印象があるなあって、  
ふと、思った。

けど、「良い嫁」ってなんだろうかと考える。

嫁がない俺にはわからないのだけど、  
ふと「良い嫁」と思うってことは、  
そういう役の佇まいに、どこか郷愁を覚えるってことだろう。

ああ、そうだ、リアリティよりは、  
ノスタルジックになる感じだ。

古い感じもしないというのに。

それもまた、不思議だ。

それと、  
男はある意味、「オオカミ」なんだけど。  
って、ことは、置いておくことにしよう。

俺は羊とオオカミのハーフだけどね。

秘密(笑)

## 人生は、奇蹟の詩（2005/イタリア）

---



監督：ロベルト・ベニーニ

出演：ロベルト・ベニーニ ニコレッタ・ブラスキ ジャン・レノ トム・ウェイツ エミリア・フォックス

『ライフ・イズ・ビューティフル』のロベルト・ベニーニが再び監督・脚本・主演を務めたラブロマンス。イラク戦争開戦直前のローマを舞台に、危篤状態に陥った別居中の妻を救うため、自らの命を投げ出し愛のために突き進む詩人の夫の姿を描いた感動作。（「キネマ旬報社データベースより」）

□ ベルト・ベニーニは魔法使いだ。

これはパンフレットの受け売りであるけれど、「魔法使い」という言葉はほんとにぴったりだ。

ベニーニ作品は、どれも僕の心を捕らえて離さない。いつも魔法にかけられてしまうのだ。

詩人のアッティリオは、自分の浮気が原因で、妻・ヴィットリアと別居することになってしまう。

それでも彼女と再び暮らすことを夢見るアッティリオは、彼女のもとにあらわれては、一方的に愛情を伝え続ける。

ヴィットリアはうんざりし、彼に告げるのである。

「ローマに雪が降って、その中で虎を見たら、暮らしてあげるわ」

それは遠まわしに、「あなたとは暮らせない」という意味なのだ。

そんな中、ヴィットリアは仕事のため、戦時下にあるイラクに行くことになる。そこで彼女は戦火に巻き込まれ、昏睡状態に陥る。

それを知ったアッティリオは、いてもたってもいられず、イラクへと向かう。戦時下のため、入国することも困難なのだが、あの手この手を使って、なんとかイラクまでたどり着く。

昏睡状態のヴィットリアに、アッティリオは命をかけて、できるすべてのことをし続ける。

医者に「生きている、でも希望はない」と言われようと、生きているならばばらしい、と希望を忘れることはない。

すべてのことをし尽くして、彼は覚めない彼女に言うのだ。

「君が死んだら、世界という舞台は終わってしまう。  
そしたら舞台のセットをばらしてしまってもいい。  
太陽は大好きだが、なくてもいい。  
僕が太陽が好きなのは、君を照らすから」

アッティリオの想いに、奇蹟が近づく...

極限状態の中でも、希望やユーモアを忘れない。  
それはベニーニも含めて、平和なぼくらだからできるたわごとかもしれない。

それでも、信じたい気持ちがぼくらにはあるんだ、きっと。

それはアッティリオが言う、こんな言葉にも表れている。

「幸福を伝えるには幸福であるべきだ。  
苦しみを伝えるには幸福であるべきだ。  
幸福になって苦しめ。苦しむことを恐れるな。  
世界中が苦しんでいる」

そして、アッティリオが詩人になろうと思ったわけはこうだ。

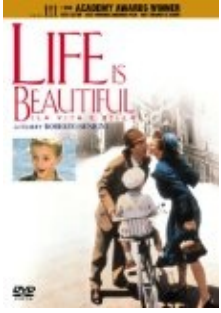
「自分の想いを誰かに言葉で伝えたい。  
自分のドキドキを他の人に伝える仕事だ」

この映画を見るたび、ぼくはそこに立ち返る。  
そうだ、ぼくはだからこうして書いているんだった。

だから幸福でいるべきなんだ、と。

## ライフ・イズ・ビューティフル (1997/イタリア)

---



監督:ロベルト・ベニーニ

出演:ロベルト・ベニーニ ニコレッタ・ブラスキ ジョルジオ・カンタリーニ ジュスティノー・デューラーノ

ナチスの強制収容所に入れられながらも、人間性を失うことなく絶望を乗り越えていく男の姿を描いた感動作。ロベルト・ベニーニ、ニコレッタ・ブラスキほか出演。（「Oricon」データベースより）

映画を観るようになったのは、ハタチを超えてから。  
それまでは、興味もほとんどなかった。

それを覆したのは、この作品と出会ったから。  
そして以降、ロベルト・ベニーニ作品にハマっていった。

舞台は1939年、イタリア、トスカーナ地方。  
ユダヤ系イタリア人のガイドは、小学校教諭のドーラに一目ぼれする。  
彼女をものにしようと奔走するガイド。  
ドーラもガイドに惹かれていき、やがて、息子のジョズエが生まれる。

笑顔の絶えない幸せな生活の中、突然、悲劇が訪れる。  
ユダヤ人はナチスの強制収容所に送られてしまう。  
ガイドはジョズエに、「これはゲームだ。1000点取れたら、戦車がもらえる」と、  
優しい嘘をつき、ジョズエとドーラを守ろうとする...

何度観ても泣いてしまうし、笑ってしまう。  
笑ってしまうし、泣いてしまう。

でも、映画の中で、誰かが涙を流すシーンはない。

と言うことに、気がついた。

誰も泣いたりしないのに、観ているぼくは泣いてしまう。

それって、すごいことかも。

ベニーニの伝えたいことは、歴史の残虐さではなくて、  
どんなときでも、「愛すること」の素晴らしさ、希望を持つことの大切さ、  
つまり、生きることの楽しさ、なのじゃないかと思う。

だから、誰も涙を流したりはしない。

地獄かもしれない状況であっても、  
「人生は、たからもの」だと、言い切ってしまうように。

泣いてしまうぼくもまた、  
それから、笑顔になっていく。

世の中に、こんな映画が存在してることだけで、  
ぼくは生きてきてよかったなと思ったりする。

だから、男たちよ、照れずに言ってみよう。

ボンジョールノ、プリンチペッサ！（こんにちは、お姫さま）

と。

## 天国はまだ遠く (2008/日本)

---



監督：長澤雅彦

出演：加藤ローサ/徳井義実

人気作家・瀬尾まいこの同名小説をチュートリアルの徳井義実と加藤ローサ共演で映画化。自殺を決意し民宿「たむら」にやって来た千鶴。その夜、彼女は睡眠薬を大量に飲み自殺を図る。だが翌朝、宿の主人・たむらの作る料理の匂いで目覚めてしまい…。(「キネマ旬報社データベースより」)

何度も読み返してしまう小説というのは、まれだ。  
音楽や詩や漫画のように、何度もリピートするには、  
小説は長すぎるからだ。

それでも何冊かは、何度も読み返してしまう。

ぼくの場合は、サン＝テグジュペリの「星の王子さま」と、  
瀬尾まいこさんの「幸福な食卓」、「図書館の神様」、  
そして、「天国はまだ遠く」。

映画化したから観ようと思ったわけではなく、  
物語のキーになる「民宿たむら」のマッチ箱がもらえるということで、  
それを目当てに観に行ったのだった。

が、どうやら前売り券を買った人に先着順でプレゼントということだったらしく、  
マッチ箱は手の入らないのであった…

とはいえ、映画は予想以上によい作りで、  
小説を読んでも違和感がなかった。

小説を何度も読んでいるせいか、  
画面の中から、瀬尾さんの文章が聞こえてくるようだった。

それは小説を読むとき、  
行間の中に想いを感じるのと似た感覚だ。

とりわけ、「ラブ&ピース以外のことを歌っている」吉幾三の「雪國」を、  
酔っ払いながら歌うところで、グッときたのは、  
映画ならではのかなと思った。

あの映像を観たとき、  
自分のいろんな出来事がふっと心の隙間に落ちたのだ。

あのときのぼくと、  
ぼくの大切なひとたち。



そんな思い出と、いまもつながっていることに、  
心が震えていた。

人と人が出会って、心が再生していくこと。  
映画になっても褪せることがなく、  
ちゃんと描かれていたことに、満足した。

## 最高の人生の見つけ方（2007/アメリカ）

---



監督：ロブ・ライナー

出演：ジャック・ニコルソン モーガン・フリーマン ショーン・ヘイズ ロブ・モロー ビバリー・トッド

勤勉実直な自動車整備工と大金持ちの豪腕実業家。病院で出逢い人生の期限を言い渡された二人の男性が、棺おけに入る前にしておきたいこととして“バケット・リスト”に書き出したことを叶えるため旅行に出かける様を描いたハートフル・ストーリー。ジャック・ニコルソン、モーガン・フリーマンほか出演。（「Oricon」データベースより）

**最**後に笑えれば。

”何もかもうまくやりたいと思うのは、わがままかもしれないけれど、  
どれかひとつをがんばると、不思議といい方向に変わりました”

と、友達の手紙に書いてあった。

自分の思うように、うまく生きることができるのなら、  
それはそのために、知らないところで、誰かががんばっているということ。

うまく生きることができていないと感じるのは、  
そのために誰かががんばっていることを、感じるができないから。

残念ながら、人は一人では、  
満たされて生きることはできない。

一人でも「独り」ではないことを、  
感じていなければ、心はいとも簡単に壊れてしまう。

私は大切にされている。

それを忘れてしまいそうなおときには、

私には大切な人がいる。

と、目を閉じて、言う。

大切にしている人がいるなら、  
それと同じように、あなたを大切に思う人がいるということ。

それを感じられる人生が、  
きっと最高ののだと、このところ思っている。

それを思って、最後に笑えれば。

くだらない話に、笑えれば。

宝物をもって、最後を過ごせれば。

## いけちゃんとはく (2009/日本)

---



監督:大岡俊彦

出演:蒼井優 深澤嵐 ともさかりえ

不思議な生物“いけちゃん”と“はく”の交流を描いた、人気漫画家・西原理恵子の絵本を実写映画化。物心ついたときからずっとはくのそばにいたいけちゃん。しかし、はくが成長するにつれていけちゃんの姿はだんだん見えなくなっていく。（「キネマ旬報社データベースより」）

はくは文章を書くとき、自分のことを「はく」と書くことが多い。それは石田衣良さんのエッセイの影響なのだけれど、友達と話すときは「おれ」と言っている。

でも、たぶん、小学2年生くらいまでは「はく」と言っていた。それがいつ、どんなきっかけで「おれ」というようになったのか、はっきりと覚えていない。

そういえば、サンタクロースの存在をいつ疑うようになったのか、夜、トイレに行くのが平気になったのもいつか、よく覚えていない。

強烈に記憶に残るような解決の仕方をせずに、いつのまにか変わっていったんだろうと思う。

けれど、変わる以前のことはよく覚えている。夜、目をつぶるだけでそこにおぼけが浮かんでしまうことや、とかげのしっぽを切ったり、ショウユバッタをつぶしたり、残酷なことを平気でしてしまうこと、いまではできないそういう記憶はちゃんとある。

そのとき、もしかして、いけちゃんはいたのかもかもしれない。

少年であったはくを、見に来てくれて、寄り添っていてくれたのかもかもしれない。

そうならうれしい。  
そうなら未来へいく楽しみがまた増える。

なんとなく、なんとなくであるけれど、  
はくはおそらく人生最後の恋人が、  
はくの少年時代に寄り添ってくれるような気がする。

そうならいいという、願望だけれど。

少年はいつかどこかで男になる。  
「大人」ではなく「男」に。

そのとき、たくさんものを失うけれど、  
失ったものがあることを、知っているだけでいいのかも、  
少年ではないぼくは思うのだった。

人生、長いもんな。  
あせらず、寄り添える人にいつか、  
逢いにいこう。

## 南極料理人（2009/日本）

---



監督：沖田修一

出演：堺雅人 生瀬勝久 きたろう 高良健吾 豊原功補

元南極観測隊員である作家・西村淳の実体験を綴ったエッセイを映画化したヒューマンドラマ。南極ドームふじ基地に派遣された男・西村。彼に課せられた任務は、同じく南極観測隊員として派遣された7人の仲間のために毎日食事を作ることだった。（「キネマ旬報社データベースより」）

**お**いしいものを食べると元気になれる。

このまえ、おにぎりを作ろうと思い、  
ごはんを手で握ったら、熱くてあたふたした。

さらに握る前に、塩を手にもぶすのを忘れて、  
ごはんはぼろぼろと崩れてしまう始末。

不細工なそのおにぎりは、それでも、  
そのときのお腹を満たすには十分だった。

十分だったけれど、  
それを誰かと笑いながら食べたら、  
もっと幸せだろうと、ふと思った。

南極という、ある意味閉ざされた世界の中で、  
身体を正常に保つには、  
「楽しむ」ということが何より大切なのだろうと思う。

だから、節分だったり、誕生会だったり、野球大会だったり、  
大人になったらあまりやらないものも、思いっきり楽しむ。  
楽しみはつくっていかなくちゃ、人って簡単に壊れてしまうのかもしれない。

その「楽しみ」の基本は、「食べる」ということかもしれない。

食べることは、生きるためだけれど、  
人が生きていくのは「楽しみ」があるからじゃないかな。

おいしいものを食べると元気になれる。  
誰かとそれを共有できたら、なおさらに。

伊勢海老は、エビフライにしちゃ、だめだけど。



## ビッグ・フィッシュ (2003/アメリカ)

---



監督:ティム・バートン

出演:ユアン・マクレガー アルバート・フィニー ビリー・クラダップ ジェシカ・ラング

エドワードは彼が語るお伽話で有名になった人物。

未来を予見する魔女のこと、一緒に旅をした巨人のこと、人を襲う森とその先にある美しい町のこと。

彼が語る「人生のストーリー」に誰もが楽しく、幸せな気になった。

しかし、一人息子のウィルはそんな父の話が嫌いだった。

長い間すれ違う父と子。そんなある日患っていたエドワードの容態が悪化し、実家に戻ったウィルに、残された時間があ  
とわずかだと告げられる。

## 死

に方を知っていたら。

父親は、息子に自分の生きてきた道を、  
おとぎ話のように聞かせてきた。

小さい頃はそれに魅了された息子だが、  
大人になってからは、どこまでが本当かわからない話に、  
父親を理解できなくなっていく。

ふたりは心が離れていくが、  
「俺の死ぬときの話をしてくれ」と、  
死期が近づく父親は息子にせがむ。  
息子はおとぎ話のような物語を必死につむぐ。  
かつて父親が聞かせてきた話のように。  
それは今まで父親がつむいだ物語に寄り添うような話だった。

そんな、父と息子の物語。

いつ死ぬかはわからないとしても、  
どんなふうに死ぬかを知っていたとしたら、  
恐れるものが少なくなるかもな。

「魔女に出会って、自分の死に方をみせてもらった」  
というくだりがあって、それが本当ならいいかもしれないと思った。

それを見たから、自信をもって、知らない道を踏み出せる。  
知らないものを見に行くことを恐れなくていられる。  
好きなこと、好きなもの、好きな人のために、歩き出していける。

そういう勇気を、



死に方を知らなくも持っていられたなら、  
心に脂肪を溜め込まないでいられるかもしれない。  
心に脂肪を溜め込むと、心が動き出すのが重くなるからね。

けれど、父親と息子の関係は、  
なかなか難しいと自分を重ねて思う。

言葉でうまくつながれないもどかしさ、くやしさを、  
それを映画の中の彼のように、ぼくも感じる。

それでもおそらく、言葉じゃなく、  
触れてきた空気の中に、父親への愛しさを感じたりできるだろう。

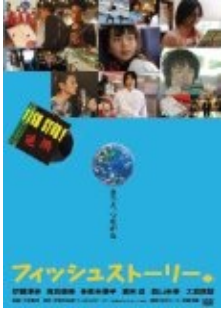
父親が歩んできたストーリーを、  
ほんのたまに知るときに、  
家族を守ってきた勇者なのだと、  
ぼくは思うことがある。

そんなこと、伝えることはできないけれど。

せめて、死ぬ間際には、  
その死に方のおとぎ話を、話してあげられるような、  
素直な自分でいたいと、思うのであった。

## フィッシュストーリー (2009/日本)

---



監督: 中村義洋

出演: 伊藤淳史 高良健吾 多部未華子 濱田岳 森山未來

1975年 早すぎたパンクバンド「逆鱗」は世間に理解されないまま解散へ向かおうとしていた。彼らは最後のレコーディングで「FISH STORY」という曲を演奏する。

1982年 気の弱い大学生は「FISH STORY」の間奏部分に「女性の悲鳴が聞こえる」という噂を聞く。さらには出会った女性に「いつか世界を救う」と予言され・・・。

2009年 修学旅行中に眠り込んでフェリーに取り残された女子高生は「正義の味方になりたかった」コックと出会う。その直後、二人はシージャックに巻き込まれる。

2012年 街が静まり返るなか、営業中のレコード屋の店長は「地球が滅亡する日でも好きなレコードを聴いていたい」と、「FISH STORY」に耳を傾けている。

「FISH STORY」という曲の間奏には、なぜ1分間の無音部分があるのか?果たして、2012年地球は滅亡してしまうのか? 時空を超えてすべてが繋がった時、想像を超える爽快なラストがおとずれる!!

”僕の孤独が魚だったら”

誰にも聞かれなかった一つの曲が、  
時代を超えて、誰かにつながり、  
彗星衝突による地球滅亡の危機を救う。

同じ伊坂幸太郎の原作の「終末のフール」でも、  
彗星が地球と衝突するという設定があったけれど、  
この話のほうが、個人的には好きだ。

ただし、原作は読んでいないので、  
読んだらまたわからないけれど。

この物語の中に、

”僕の孤独が魚だったら”

というフレーズが頻繁に出てきて、  
しばらくそれが胸にこだましている。

それはただの誤訳で「フィッシュストーリー」、  
つまり「ホラ話」ってことなんだけど。

壮大なホラ話に、夢や希望が詰まってる気がして、

なんだかその言葉はキラキラとしている。

意味はなくても、そこにすべての想いが込められてるような。

本気で何かに立ち向かうこと、  
正義の味方になること、  
誰かに届けと願うこと、  
あきらめないで祈ること。

ホラ話でも、信じて歩いて行けちゃうような、  
少年の心が、その言葉に乗っかってるような、  
そんな気がしてならない。

”僕の孤独が魚だったら”

そうか、これはぼくの中の少年のキラキラだ。

しばらく、この曲はぼくのテーマソングとなるだろう。

それがいつか世界を救うことにならないか、  
などと、壮大な「フィッシュストーリー」が、  
僕の頭の中で広がっていくのだった。

どうやら伊坂幸太郎原作の映画が好きなようです。  
でも、小説で読む感じではないんだよなあ...

なんとなくなんだけど。

## 青い鳥（2008/日本）

---



監督：中西健二

出演：阿部寛 本郷奏多 伊藤歩

重松清による話題の感動小説『青い鳥』を映画化。一人の生徒が起こしたいじめによる自殺未遂によって大きく揺れていた中学校を舞台に、臨時の教師をして赴任してきた男性教師と生徒達との交流を描いた人間ドラマ。

か かって十四歳だったということ。

このところドラマをちゃんと見ていないのだけど、少し前は医療ドラマが多くて、最近は刑事ものがやけに目をついた。そして今年は学園ものが多いなあって気がする。（あくまで個人的な印象です、あしからず）

学校が舞台の話は数あれど、だいたいパターンが同じような気がする。

荒れたクラスに新任の先生がやってきて、最初はみんな毛嫌いしてるけれど、徐々に信頼されていって、最後は「先生やめないで」みたいな。

それか、あまりにディープな、だけどこれが現実ですよ、みたいな感じの話とか。

そんな王道パターンでも、おもしろい作品は面白いので、まったくOK。

けれど、この「青い鳥」は、そういうものとは違う、本当のことを描いていると感じて、心に沁み渡った。

いじめで自殺未遂をした野口君が転校し、残された生徒の前に、吃音の教師、村内がやってくる。野口くんの事件を、「反省」という形だけで終わらせたクラスに、村内先生は「忘れるなんて、ひきょうだ」と、野口くんの席を教室に戻し、毎朝「おはよう」と声をかけ続ける。特別なことはしない、ただ、それだけだ。その姿勢に、何人かの生徒の想いが変わり始める。

「ほんとう」だと感じるのは、教師ができる範囲の教育は限られている、ということだ。

反省文を何枚も書きなおさせ、言葉だけの反省をうながす学校に対し、「本気で言ったことは、本気で聞かなきゃだめだ」と、本当の言葉を書きたい人だけ書き直すようにうながす、村内先生。

何人かは、自分の心と向き合い、野口君を忘れないことを、心に刻む。

そこに「ほんとう」がある。

すべての生徒の心を変えることはできない。でも、意識させることはできる。

いじめていると思っていなかったことを、自分もいじめていたのではないか、その加害者ではないのか、そう意識することが、大切な「ほんとう」のことだ。

ぼくが中学生だった頃、ぼくの学校の中では、いじめというものはあまりなく（ある感じがしないと言ったほうが適切か）、クラスは平穏だった。

だけど、同じ年代の生徒が自殺を図るニュースが多くあった。

自殺は、殺意が自分に向いている状態で、その方向が相手に向かえば、殺人を犯すこともできる。

自殺が多いということは、誰かを殺す可能性も多くあるのだ。

そんなことを、十四歳のときは真剣に考えていたと、この映画を見て思いだした。

そして、自殺にまで至らなくても、どこかでちょっとずつ誰かを傷つけていたこともあるんじゃないかと、そんなことも思った。

人生に慣れていくにつれ、傷つかない方法も手にした代わりに、誰かへの優しさも減ってしまった気もする。

だからやっぱり、人は人を傷つけてしまうことがあるってことを、大人になっても忘れちゃいけないわけだね。

淡々と進む物語に、淡々と心が狭くなって苦しくなるような、本当の中学生の気持ちが、ここにはあるような気がした。

少なくとも、ぼくが中学生のときの心の動きは、こんな感じだったのだ。

そしてエンディングテーマの、まきちゃんぐ「さなぎ」もぐっときます。

## 英国王のスピーチ (2010/イギリス)

---



監督: トム・フーパー

出演: コリン・ファース ジェフリー・ラッシュ ヘレナ・ボナム=カーター ガイ・ピアース ティモシー・スポール

コリン・ファース主演の伝記ドラマ。子供の頃から吃音のために無口で内向的なジョージ6世が国王に即位。折しもヒトラーの率いるナチスドイツとの開戦を余儀なくされる中、王は国民の心をひとつにすべく渾身のスピーチに挑む。（「キネマ旬報社データベースより」）

内気な吃音の英国王、ジョージ6世の物語。

内気で、コンプレックスに苛まれながら、  
野心は捨てきれずにいる。  
その弱さに、真摯に立ち向かう彼の強さを感じる。

そして、それは一人じゃないからこそ、  
生まれるものなのかもしれないと思う。

決してスマートに物事を進められるわけじゃない。  
そういう彼だからこそ、支えてくれる家族がいて、  
「ドクター」ではなく、友人として支えてくれる人がいる。

最近、思う。愛を感じて育った人は、  
その愛の基準を求めんじゃないかということ。

その基準をクリアしないと、淋しくなる。

それは、愛をわかっているから。

愛をあまり感じるができずに育った人は、  
愛の基準が、きっと違う。

だから、淋しいという感覚も、きっと違う。

愛されなかったというコンプレックスがあるからこそ、  
人一倍、愛を感じる事が、彼にはできたのかもしれない。

この映画は、スルメみたいだ。

噛めば噛むほど、人生の味を感じられるような。

弱さに立ち向かう強さと、  
大切なものが何かということが、  
言わずして、伝わってくる。

大人なら、見ておきたい、上質な映画だ。

## アブラクサスの祭 (2011/日本)

---



監督:加藤直輝

出演:スネオヘアー ともさかりえ 本上まなみ 村井良大

現役在住職である芥川賞作家・玄侑宗久の同名小説をミュージシャンのスネオヘアー主演で映画化。音楽に対する狂おしいほどの思いを断ち切ることができず、心の病に悩む“元ロック・ミュージシャン”の禅僧・浄念がロックを通して再生していく姿を綴る。（「キネマ旬報社データベースより」）

まとめると。

ウツの坊さん、元ロッカー、お寺でライブ。  
自分というのはどこにもいない、  
あるがままではなく、ないものとしてそのまま、受け入れよ。

ということ。

映画でも、ドラマでも、小説でも、  
いつ出会うかによって、感じ方はまるで変わってくる。

感受性がせつなすぎるくらい、豊かなときには、  
心が震えるものも、  
分厚い盾を身につけて、はね返せるときには、  
心にまで届くことがなかったり。

人との出会いもそうだ。

いつか大切にしてきたものも、  
何かの拍子に、「いらぬもの」に変わることもある。

立ち止まっていられないから、  
刻々と、変化していくもの。

そんな刻々と変化していく中で、  
それでも常に思うことは、

「味方」がいるってことの、心強さ、だ。

味方のいる世界だから、  
なんとかやっていける。

最高だという瞬間にだって出会える。



ときどき、もうだめだと思っても、  
生きてる方がいいと思うから、生きてる。

生きてると、答えのない謎々が積み重なる。  
いつかその答えかもしれないものにも、会える日がくる。

だから、生きてる。

いまは、ただ、伝えたいと思う人に、  
伝えることができないことで、  
ときどき世界の意味をなくしたりしている。

それでも、生きている。

生きているんだよ。

生きていくんだよ。

.....まとめると。

ストーリーとかじゃないタイプの映画だと思うけど、  
感受性のすみっこに、引っかかるものがあったということ。

そういうことだ。

ところで、この映画の夫婦役の、  
スネオヘアーと、ともさかりえは、  
その後、実際に結婚したらしい。

夫婦のシーンは、  
本当によかった。

なんというか、  
とても淡々としているのだけど、  
夫婦ってそうなんだろうと思って、  
かなりぐっときた。

夫婦が作る絆って、  
他の誰かじゃ、だめなんだろう。

きっと、そうだ。

## はやぶさ/HAYABUSA (2011/日本)

---



監督: 堤 幸彦

出演: 竹内結子 西田敏行 佐野史郎 山本耕史 鶴見辰吾

2010年6月に地球へ帰還を果たした小惑星探査機<はやぶさ>に関わった人々の姿を描いた実話ドラマ。小惑星からサンプルを採取して持ち帰るミッションに挑んだ宇宙科学研究所の職員たちの奮闘を綴る。（「キネマ旬報社データベースより」）

ここでこうして、言葉を綴っていても、  
誰にも届いていないんじゃないかと思うときがある。

それと同じように、いつか解り合った人の心も、  
今は届いていないのかもしれない、思うときもある。

たぶん、信じ切れていないんだろうな。  
たぶん、変わっていくことが怖いんだろうな。

どうがんばっても、  
時間は進んでいくというのに。

でも、「はやぶさ」によって、  
そんな、ちょっとせつない想いを、  
少し、緩和するような気持ちになった。

通信が途絶えてもなお、  
「はやぶさ」に信号を送り続ける人たち。

「校庭の中の、一粒の砂を見つける」ほどの、  
途方もない、その作業。

何年かかるかわからないし、  
見つけることができないかもしれない。

確証のない時間を費やしながら、  
その道の途中で、それを見届けることが出来なくなった人もいる。

それでも、続けていくこと。

「科学」への信頼が、それを可能にするんだろうか。

それもきっとあるけれど、  
それよりも前にあるのは、

「情熱」なんだろう。

7年の時を経て、地球に帰ってきた「はやぶさ」が、  
「イトカワ」のサンプルを吐きだしながら、  
燃え尽きていく瞬間は、あたかもそこに意思があるかのように思えた。

「はやぶさ」もまた、  
時空を旅して、みんなの「想い」に応えようとしてるみたいで、  
心が熱くなってしまった。

生きてることは、「確証」のない、旅なんだろう。

いま、誰かに伝えたい言葉も、  
「伝わる」なんていう確証はない。

それでも、伝え続けること、  
存在を奏で続けることは、  
何かにつながるのかもしれない。

それが何かわからないし、  
それにつながるのが、明日かも、何十年後かも、  
わからないけれど。

たとえ、何にもならなくても、  
そんな情熱を、持ち続けることにしよう。

ありがとう、はやぶさ。

## 幸せの教室(2011/アメリカ)

---



監督：トム・ハンクス

出演：トム・ハンクス ジュリア・ロバーツ ブライアン・克蘭ストン セドリック・ジ・エンターテイナー タラジ・P・ヘンソン

大卒でないことを理由に、長年勤めていたスーパーを突然クビになってしまったラリー・クラウン。再就職もままならず、思い切って短期大学に入学する。人生の再出発を図る中で、年齢も境遇も様々な生徒たちとの交流や女性教師との恋を描いたハートフル・ストーリー。（「Oricon」データベースより）

主演、トム・ハンクス。

ってことは、たぶん奇跡を起こしちゃうんだろうなあ。  
（そのパターンが結構好きだ）  
なんて思いながら、観た。

で、奇跡が起こったかというと、  
まあ、起きた訳なのだけど、  
この映画に関しては「手に届く奇跡」のような印象を受けた。

と、言いながら、よくよく考えてみると、  
リストラされた中年男性が、  
大学に入り、若者と友達になり、  
さらに女性教授ともいい感じなるなんて、  
手に届く気はしないのだけど。

たぶん、トム・ハンクスの役のイメージが、  
もっと壮大な奇跡を起こす、というのがあるから、  
これくらいが、「手に届く」と感じたんだろう。

奇跡の話はこれくらいにして、  
それよりも、トム・ハンクスの役柄に感じたことは、  
「受け入れる心」を持っているということだ。

心が純粋とか、無垢とかいうことじゃなくて、  
目の前にある状況を、受け入れる、  
そして、楽しんでみる。  
自分と違うように見えるものに対して、  
挑戦的な態度をとらない。

これって、大人になっていくにつれて、どんどん難しくなる。

だって、積み重ねてきた自分を、  
壊されたくはないから。

でも、どうだろう。

本当に積み重ねてきた自分があるなら、  
何も壊されることなんて、ないんじゃないだろうか。

むしろ、その上にまた、  
知ることのなかったピースを積み上げて、  
それが、自分の新たな一部になっていくんじゃないだろうか。

だとすると、「受け入れる心」というよりは、  
「積み上げる心」というのが、適切かもしれない。

うまくいかないこともたくさんあるけど、  
うまくこともときどきある。

そのくらいのバランスで、  
よろこびの濃度は、濃くなっていくのかな。

そんなことを考えながら、  
これもまた「手に届く奇跡」の一部かと、思ったのだった。

## 阪急電車 片道15分の奇跡 (2011/日本)

---



監督: 三宅喜重

出演: 中谷美紀 戸田恵梨香 南果歩 谷村美月 有村架純

制作: 有川浩 岡田恵和

人気作家・有川浩のベストセラー小説『阪急電車』を映画化!宝塚から西宮北口間を走る、えんじ色の車体にレトロな内装の阪急今津線。その電車に様々な愛に悩み、やりきれない気持ちを抱えながら、偶然乗り合わせただけの乗客たちがいた。片道わずか15分のローカル線で起こる、世代を超えた温かい奇跡の物語。(「Oricon」データベースより)

「幸せになる」ということに対して、  
男よりも女の方が、こだわり具合が格段に上だと思う。

あくまでぼくの感覚であるけれど、  
男のぼくは「幸せになる」というよりは、  
「幸せだと思う」ということのほうが、しっかりとくる。

何でもないようなことが～ 幸せだったと思う～  
ってな感じだろうか。

そんな何でもないようなこと(よく考えると何でもなくはないのだけど)に、  
つまずきながら、一步一步進むような感じの物語。

どこか初々しくもあり、置き忘れてしまった大切なものが、そこにはある。

いつまでたっても、人生には慣れっこにはなれないけど、  
慣れないときの強い想いは、美しいあと、感慨にふけてしまった。

そういえば、中学生のときに、クラスメイトの女の子に、  
「ゆひくんは、今、幸せ？」と聞かれたことがある。

それは、プリント用紙を後ろに回しているときだ。

その態勢のまま「え？」とぼくは止まり、  
「うーん」と考え込んでしまった。

なんと答えたのか思い出せないのだけど、  
あのとき、はじめて「幸せとはなんぞや」と深く考えことは、  
はっきりと覚えている。

考えてるうちに、彼女のことが好きになり、  
そして、結局フラれるのであった。

それは、幸せじゃなかったなあ。

でも、そういう時間の積み重ねが、

幸せの種を蒔いているような気がする。

その種が花を咲かせているのかというと、  
これまた、「うーん」となってしまうのだけど、  
人生は悪くないという日々とも逢えるわけだ。

「あなたは幸せですか？」と聞かれて、  
日本人は世界と比べて、「幸せ」と答える比率が少々劣るらしいけど、  
それは言葉に対する意識の違いなんじゃないかと思う。

だって、「幸せ=楽しい=嬉しい」だけじゃないですか？  
せつない、やさしい、なつかしい、こそばゆい、あたたかい、  
そんな気持ちにたいする「幸せ」だって、持ち合わせてはいないですか？

その感覚は、つまりは、世の中って、  
いい奴ばかりじゃないけど、悪い奴ばかりでもないってことが、  
本当のことだってことです。

そして、ブルーハーツの「TRAIN-TRAIN」が浮かんできたのも、  
本当のことです。

たぶんそれは、男性的な感覚であるけれど。

ああ、ロマンチックな星空に、あなたを抱きしめていたい。

## サヨナラCOLOR (2005/日本)

---



監督：竹中直人

出演：竹中直人 原田知世 段田安則 雅子 中島唱子

制作：竹中直人 馬場当

20年間、一途に初恋の人を想い続けてきた医者 of 男を描いた、馬場当原作のラブストーリー作品。竹中直人が監督・主演・脚本の三役を兼ねて贈る。（「Oricon」データベースより）

女性にわからない男のロマンがあるとして、これは、紛れもなく、そんな「男のロマン」だと思う。

高校時代の憧れの人を、一途に想いながらも、現実では少し女性にだらしないところがある、中年の医者 of 話。

入院してきた高校時代のマドンナは、彼のことをまったく思い出せない。それでも思い続ける彼は、病魔に蝕まれる彼女を救うことに、全力を傾ける。

というのが物語の筋なのだけど、たぶん、女性にはあまり共感できない部分が多いと思う。

それは切り取られる男声像が、あまりに純粹であるからだ。

その「純粹」というのは、「汚れていない」ということではなく、むしろ、男として汚れている、という純粹さ。

たとえば、胸の奥にずっと想う人がいるってことと、あわよくば、近くの誰かとどうにかなりたいたいって、両極を、同時に持っていられたってことを、女性が理解できるとは思えない。

だから、これは監督である、竹中直人が、自分のその純粹さを救うための、話なのだと思う。

もし、そうじゃないとしても、そういう「男として汚れている純粹さ」が、確実に、僕の心を救っているわけで。

だってね、ずっと想い続けるってことは、けして美しいことではなくて、想い続けられるほうには、負担でしかないってことがあるわけですよ。



どんなに想っても、  
自分の望むようには届かないことが、  
たくさんあるわけですよ。

こと、恋愛においてはね。

なのに、想い、  
なのに、寂しさに負ける、  
賢くないのです、男って。

賢くないから、美しい未来を、  
想い描いてしまうのです。

この報われない想いが、  
いつかどこかで、めぐりめぐって、  
あなたに届く。

なんてことを。

じゃないと、同時進行で起こる、  
この心のモヤモヤをどうにかできないからです。

そう、これは男のどうしようもなさを、救済する、  
男専用車両みたいな映画なのです。

男の心の中に住む、原田知世に、  
「ありがとう」と言われたい話なのです。  
そして、段田安則よりは、いい男だぞっていうのを、  
自負したい話なのです。

まあ、でも、清志郎の声に、  
わけもなく泣けてくるのは、男も女もありません。

《さよならからはじまることがたくさんあるんだよ》

本当に、本当に、ああ、そうだね。

## ポテチ (2012/日本)

---



監督：中村義洋

出演：濱田岳 木村文乃 大森南朋 石田えり

同じ生年月日でありながら、対照的な人生を歩む2人の青年—

原作は、伊坂13冊目の中短編集『フィッシュストーリー』(新潮文庫刊)のなかの中編『ポテチ』。

仙台の街で生まれ育った2人の青年の奇妙な運命を独特の切り口で描いた感動の人間ドラマです。

プロ野球のスター選手・尾崎と、空き巣を生業とする凡人・今村、別々の人生を歩んでいるかのように思えた2人は、目に見えない強い力で引き寄せられていった……。

そんな運命に翻弄される主人公を通して、家族や恋人、友人、大切な人を想うあたたかな気持ち、運命に負けない強い心を独特のユーモアで描いていきます。

先月、免許の更新に行ったときに、  
ふと気付いたことがある。

それは、そこにいる人たちがみな、  
「秋に生まれた」ということだ。

それに気が付くと、  
隣の人も前の人も後ろの人も、  
秋っぽい雰囲気があるなあと、  
思ったりした。

それは、勝手な思い込みでしかないわけだけど、  
どこか急に、親近感が湧いた。

その中に、同じ年、同じ月、同じ日に生まれた人もいたのかもしれない。  
そう思うと、そわそわして仕方がなかった。

たとえばそういう人がいたとして、  
その人がまったく秋っぽくなく、  
価値観も相容れない生き方をしていたとしよう。

それでも、それを「もうひとつの生き方」のように思えてしまうだろう。

その人が「コンソメ味」で、  
ぼくが「しお味」だったとして、  
その違いから生まれるものに、泣いてしまうようなことだって、  
あるのかもしれない。

伊坂幸太郎の短編集「フィッシュストーリー」の中の一編「ポテチ」の映画化。

伊坂作品おなじみの仙台を舞台にした、

同じ年同じ日同じ場所で生まれた「相容れない」ふたりの物語。

フィッシュストーリーが短編のわりに、  
壮大な映画に仕上がっているのとは対照的な、  
68分のショートフィルム。

それもまた「コンソメ味」と「しお味」のように違うのだけど、  
伊坂幸太郎作品と言う名の「ポテチ」だなと思ったわけで。

相変わらず、斉藤和義の歌はいいし、  
仙台の街並みにも、いつのまにか親近感を覚える。

ただ、「黒澤」役だけは、大森南朋じゃなく、  
「ラッシュライフ」のときの堺雅人がよかったなあと、思ったけれど。

それもまた、好みか。

それでも、仙台の人は格別なんじゃないだろうか。  
「仙台で映画を撮る」そのこともまた、  
心が揺さぶられる、ひとつなのかもしれない。  
「運命に負けない」それを伝える映画だから。

ところでぼくは、「コンソメパンチ」が好きだ。

どうでもいいかい？

それなら、きみの「のりしお」と交換しよう。

何かを交換し合う人生は、悪くない。

## 任侠ヘルパー（2012/日本）

---

脳死は人の死かってことを、  
考えたことがある。

脳が死んでいるのだから、  
体に指令は送れない。

指令のない体は意思を伝えることができないし、  
意思を伝えられないということは、「生きている」とは、  
言えないのかもしれない。

けれど、心臓は動いている。  
動いているということは「生きている」ということ？  
でも、意思を伝えることができないなら。

堂々巡りになる。

多少角度は違うけれど、「痴呆」という状態も、  
「本当にわからない」のかが、わからない。

心臓は動いているし、体も動いている。  
けれど、脳はそれと裏腹に、正しい意思を指令していない。

そのとき、その人が本当に心に描いたものは、  
どうやって伝わるんだろう。

脳の指令がうまく伝達しなくても、  
「心」がある。

心には「記憶」がある。

記憶には「愛」がある。

その愛が、きっと、真心に変わる。

真心は、「優しさ」を連れてくる。

優しさは、「懐かしさ」を、お土産にする。

懐かしさの中にある、記憶、愛、真心、優しさ。

それが、きっと命を動かしている。

だから、いま、愛せる人のことを、  
きちんと愛するってことが、大切なんだ。

その記憶が、そのぬくもりが、  
いつかその人の支えになるのだから。

映画の中の一場に、  
そんなことを感じたのであった。

## まほろ駅前多田便利軒（2011/日本）

---



監督：大森立嗣

出演：瑛太 松田龍平 片岡礼子 鈴木杏 本上まなみ

三浦しをんの直木賞受賞原作を、瑛太と松田龍平共演で映画化。東京郊外のまほろ市で便利屋を営む多田の下に、風変わりな同級生の行天が転がり込む。一晩だけのはずが行天は一向に出て行かず、多田はしぶしぶ便利屋の助手をさせることに…。(Oricon) データベースより)

金子みすゞの詩で、「こころ」というのがある。

おかあさまは  
おとなで大きいけれど、  
おかあさまの  
おこころはちいさい。

だって、おかあさまはいいました、  
ちいさい私でいっぱいだって。

わたしは子どもで  
ちいさいけれど、  
ちいさいわたしの  
こころは大きい。

だって、大きいおかあさまで、  
まだいっぱいにならないで、  
いろんなことをおもうから。

人は生まれる環境を選んで来れないし、  
そのことで、「愛される」という実感を持つことができない、  
ということも起こりうる。

その親のこころは、きっとおおきいのだ。

ちいさい子どもでいっぱいにならない、

おおきなところが、こどもを隅に追いやってしまう。

そんな気がする。

ちいさなところがいっぱいになるとき、  
親はこどもを、めいっぱい抱きしめる。

いっぱいになっているのを知るとき、  
こどもは「愛される」ということがわかる。

必要とされている、ここにいてもいい、  
という安心は、同時に希望になるのだ。

ちゃんと、必要だよ、  
それは、希望だよ。

そういう想いを誰もが持てたら、  
いらぬ悲しみが少なくなっていくはずなのに。

あなたは、ちいさなところがいっぱいになってる？

それを忘れては、いけないよ。

## モリー先生との火曜日（1999/アメリカ）

---



監督:ミック・ジャクソン

出演:ジャック・レモン ハンク・アザリア ウェンディ・モニツ ボニー・バートレット ジョン・キャロル・リンチ

誰もが羨む華やかな生活を送るスポーツライター。ある夜、テレビで大学時代の恩師の話聞いた彼は教授の下を訪ねる。毎週火曜日、「本当の幸せ」を学ぶために…。名優ジャック・レモンの遺作となった感動のノンフィクション・ドラマ。

いまでも心に残っている先生のことば。

僕の場合は3つある。

ひとつめ、小学校2年生のとき。  
ふたつめ、小学校4年生のとき。  
みつめ、中学校3年生のとき。

小学校2年生のときの先生は、I先生という、二十代の女性の先生。

それが具体的にどういう出来事があったの言葉か忘れてしまったけれど、おそらくケンカしたときか何かに、言ったんじゃないかと思う。

先生は「相手の立場になって、考えてみよう」と言った。

まだ素直だった僕は、それから「相手の立場」になってみることを、まず考えるようになった。

けれど、どんなに考えてもわからないときもあって、ケンカになりそうになると、相手の立場になるまえに、深入りしないようになった。そして次第に、「自分と似た人」といることが多くなった。

十代まではそんなふうに、「自分に似た人」を見つける能力が研ぎ澄まされていて、それによって「安心感」を得ていたように思う。自分に似た人は、思考が似ていて、「相手の立場」を想像しやすかったからだ。

反面、相容れない人と関わらないわけだから、視野の狭い世界にいたともいえる。

思い通りにならないことはたくさんある、ということに対して、僕が十代に培ってきた「安心感」は、もろいものでもあったと、



大人になり、気付くことになる。

4年生のときの、S先生は、30代くらいの、女性の先生。

小学生のときの僕といたら、  
それはそれはただの野球少年で、  
それ以外のことは、あまり興味がなかった。

どうして体育に野球がないんだろうと僕は思っていて、  
しきりに先生に「野球がやりたいです」とせがんだものだ。

S先生は、それを了承してくれた。

あのときのうれしさったら、  
思い出しただけで、笑顔になれてしまうくらいだ。

そんなわけで、S先生が、すごくいい先生だと思ったわけだけど、  
それよりも、ずっとあとになって思い出す言葉がある。

それは、「きみは文章で自分の気持ちを表現するのが上手です」という言葉。

どうして、あとになって思い出したのかというと、  
それから少しずつ、「書く」という作業によって、  
自分の心が落ち着くのだ、ということに気付き始めるからだ。

小学生のときに書くことなんて、作文くらいしかなかったし、  
本を読むことだって、まるで興味がなかった。

なのに、「文章で自分の気持ちを表現するのが上手」というのは、  
そのときは、あまり信じることができなかった。

けれど、「思い通りにならないこと」に遭遇して、  
「安心感」が揺らいで行き始めると、  
僕はそういう気持ちを文章にしたためるようになっていた。

最初、それは完全に自分のためのものであって、  
自分が心をうまく保つだけの作業だったのだけど、  
それも、どんどんと形を変えていく。

それは、もしかしたら、自分の言葉が、  
誰かにも必要になっているかもしれないと、  
わかってきたからだ。

中学3年生のときの、K先生は、27才くらいの、男の先生だった。

15才の僕からしたら、まだずいぶんと年が離れていると思っていたけれど、  
心の感覚は、すごく近いものを感じた。

だから、ときどきため口にもなってしまうこともあった。

その先生は、たとえば昼休みとか、  
僕がベランダでぼーっとしていると、  
黒板消しを持って、それについた粉を飛ばしながら、  
「どうした？」と声をかけてくれた。

僕は、盗んだバイクで走らないけど、  
窓ガラスも割らないけれど、  
わかりやすく思春期だったから、いろんなことを深く考え込むくせがあった。

ベランダで気持ちを吐露すると、

先生は言ったのだ。

「未完成の人間が、未完成の人間を教えるのだから、  
教師っていうのは、難しい仕事だよ」

僕はそれまで、大人というのは、  
自分の気持ちに嘘をつけて生きているものだと思っていたから、  
その先生の言葉に、すごく驚いた。

そして、そうやって自分の弱さも、  
きちんと言葉にしてくれることが、  
すごくカッコいいことだと、思ったのだ。

いつしか僕は「わからないひと」の、  
「ほんとうのこと」に手を差し出したい、と思うようになった。

それは僕が未完成の人間であって、  
相手も同じだということが、とても面白いことだと、  
感じるようになったからだ。

先生はそのあと、こう続けた。

「でも、きみのような生徒に出会うことが、教師の喜びだな」と。

ときはながれて、僕はもうそのときの先生よりも年上になってしまった。

相手の立場になってみたり、  
気持ちを文章にしてみたり、  
自分の弱さをきちんと認めてみたり。

幼いときに会った言葉が、  
ときどき壊れそうになる僕の心を、  
支えてくれたりする。

それは、すごいことだ。

すべてのことばが、すべてのひとに響くなんてことはない。

だけど、自分にとっての真実を、  
誰かの言葉によって見つけることができるかもしれない。

それは教師じゃなくたって、誰だって。

僕がこうして何かを書くのは、  
すべてを伝えて、死にたいからだ。

「死」というのは、  
体がなくなってしまうことだけじゃなく、  
「一瞬の別れ」のことでもある。

たとえば、絆を作ったはずの友達でも、  
愛しあったはずの恋人でも、  
はたまた、そのときたまたま仕事しただけの人でも、  
このブログに間違っただけの人でも。

そのときの「すべて」を伝えても、  
その人に残るものは、ないのかもしれない。

でも、あるのかもしれない。

ぼくらはみんな違うから、それはわからない。

そうして死ねるってことは、  
そうして生きられるってことだ。

えーと、まったく映画のことは書いてません(笑)

まあ、いつも通りではあるのだけど。

じゃあ、モリー先生の一語を一つ。

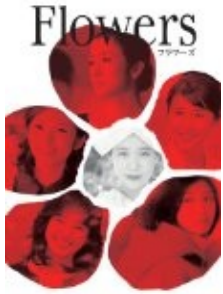
「愛し合わなければ、人は死ぬ」

異性愛でも、親子愛でも、友愛でも。

愛は勝つって、北野たけしのCMのセリフが、重なりながら。

## Flowers (2010/日本)

---



監督：小泉徳宏

出演：蒼井優 鈴木京香 竹内結子 田中麗奈 仲間由紀恵

蒼井優、鈴木京香、竹内結子、田中麗奈、仲間由紀恵、広末涼子が夢の競演!様々な時代環境の中、自分の本当の姿を探しながら人生のターニングポイントに直面しながらも、賢明に強く美しく生きる6人の女性を描く。(「Oricon」データベースより)

「正しいこと」というのは、トーナメントを勝ち上がってきたものが、今、ここで、ずうずうしく、居座っているだけだ。

だから、今、正しいとされていることというのは、本当に「正しい」かどうか、重要なのではない。「正しいと思いたいもの」が、時代とともにある、ということだ。

時代は気付かれないように、そっと変わっている。

あのときは正しかったけれど、今は正しくありません。

そんなことは、ざらにある。

それでも「命をつなぐ」ということを、いきものは「正しいこと」と思いたいのだと思う。

その担い手である、女性は、だから、愛することに命をかけられるのだ。

だって、自分の命が削られるとしても、

「もし産まないってきめたら、私はもう笑えなくなる」

とまで言えるのだから。

それが刹那的な感情だとしても、そう思えるほどの強さを本能的に持っている、ということは、すごいことだと思うのだ。

けれど、そこまでの感情を有しながら、子供を愛せない母親になってしまうこともある。

もし父親にできることがあるのだとしたら、

そうならない手助けをすることじゃないだろうか。

子供愛せなくなることだって、「もう笑えなくなる」のと、  
同じことだと思うのだ。

もし、「正しいと思いたいこと」の中にそれが入っていなかったら、  
そんな世界はなくてもいいと、言いきってしまいたい。

Flowers

花を愛でるように、きちんと、愛そう。  
自分が貰っている愛のように。

## 神様のカルテ（2011/日本）



a

監督：深川栄洋

出演：櫻井翔 宮崎あおい 原田泰造 西岡徳馬 池脇千鶴

心を救う内科医・イチと心を癒す妻・ハル。寄り添うことで温まる、やさしい命の物語。

美しい地方都市・松本の内科医として働く栗原一止（通称イチ）。寝る間もないほどの忙しさと働き回っている一止は、同僚や上司、御嶽荘と呼ばれるアパートに住む友人、そして何よりも最愛の妻・榛名（通称ハル）に日々の疲れを癒されながら激務を凌いでいる。そんな一止の前に、大学病院から見放された末期ガンの患者が現れる。もう医学ではどうしようもないその患者は何故か一止を頼ってきていた。ずっと心の中におもりがあるような生活を送って来た一止はそんな患者と向き合う中で、命を救うこととは？人を救うこととは？という医者としての在り方、人間としての在り方を見つめ直していくことになる。厳しい言葉をかける同僚。答えを簡単にはくれない上司。心に突き刺さる一言をくれる友人。何があっても支え続けてくれる愛妻・ハル。そんな多くの人たちとのふれ合い。そして、一止はそんな中から“ある決断”を下す・・・。

西洋医学は「病氣」を診るが、  
東洋医学は「人」を診る。

というのを聞いたことがある。

聞いたことがあるレベルなので、  
それ以上は詳しくは、わからない。

でも、それに優劣があるわけではなく、  
たぶん、「違い」がある、ということなんだろうと思う。

「病氣」を診る、ということは、  
治るか、治らないか、ということに主眼を置いている気がする。

「人」を診る、ということは、  
病氣とどう向き合うか、ということを最初に考えている気がする。

どちらにせよ、医師にとって「言葉」と「想い」いうのは、大切なんじゃないかと思う。  
いや、医師にとって、というよりは、患者にとって、というべきか。

医師と患者は、「対等」ではいられない。  
患者はどうしたって医師に頼ることになるのだから。

その気持ちに寄り添える「言葉」と「想い」を、  
勝手だけれど、欲しいと思うのだ。

悲しみに慣れて、もう涙は流すことがなくなっても、  
「心」は、泣いている、そんな「想い」を持ってくれることは、  
とても心強いものなんじゃないだろうか。

悲しみに慣れなければ、医師なんて続けられないとしても、  
「慣れること」が「忘れる」ってことじゃないことを、信じたい。

それは、医師だけではなく、何かに慣れ過ぎた、ぼくたちにも言える。  
生きることに慣れて厚かましくなった心は、  
ときどき、簡単に誰かを傷つける可能性を秘めているから。

忘れそうになったら、桜井翔の演じる主人公「栗原一止」の名前を思い出すといい。

こんなセリフがあった。

一止。

続けて書くと、「正しい」という字になる。

前に前に進むことだけが「正しい」と言うけれど、  
立ち止まって迷って悩んでいる足もとに、正しいことがあるかもしれない。

と。

「悩まない若者は生意気」なのだから。

あ、じゃあ、悩んでいられるうちは、  
ずっと若いってわけだね。

若くない大人は、たぶん、いないんだろう。

## Presents~合い鍵~ (2006/日本)

---



監督：日向朝子

出演：広末涼子 玉山鉄二 有村実樹 安田顕 真山明大

角田光代の小説「Presents」を映画化、広末涼子と玉山鉄二が共演したラブロマンス。8年間付き合ってきた彼に、ある日突然の別れを告げられた由加里。何の予定もない週末、彼女は一番近い人からのプレゼントに気付く。（「キネマ旬報社データベースより」）

「**違**う景色を、お互い一生懸命に説明しているだけなんじゃないかな」

角田光代さんの短編集「Presents」の中の1編が、45分間のショートムービーに。

以前、小説で読んでいたが、映画で観るのも、なかなか。

8年間付き合った彼氏にふられる女性。

彼氏にもらった合い鍵の思い出がよみがえる。

たったそれだけ。

それだけの中に、8年の想いは込められる。

別れ話のシーンで、  
彼氏は冒頭のセリフを言う。

「おれたちは、見ている景色が違う気がする。  
それをお互いに一生懸命説明してるだけなんじゃないかな」

これは、人と付き合っていく上で、とても重要なことではないかと、ぼくは思う。

違う景色をお互いが新鮮に思えて、それを楽しめることも多いけど、  
背中と背中で支えあうことは、きっと疲れてしまう。

それしか支える方法がないとしたら、  
それは人生を一緒に歩いていく男女の関係よりも、  
もっと違う関係でいるほうがいいのかも说不定いな。

それが何かはわからないけれど。



6年付き合っ別れた、という友達も、同じようなことを言っていた。

きっと、違う景色を説明しあうことに、疲れてしまったんだな。

それでも、過ごした時間のぬくもりが愛しいなら、  
それだけ、お互いを幸せにしていたものがあったということだ。

だから、そこから離れることも、ちゃんと正しいのだよ。

そう思って、進んでいきたいものだね。

## エターナル・サンシャイン (2004/アメリカ)

---



監督: ミシェル・ゴンドリー

出演: ジム・キャリー ケイト・ウィンスレット キルステン・ダンスト マーク・ラファロ イライジャ・ウッド

不思議な手紙により、恋人が自分との記憶を消したことを知った男は、自らも彼女との記憶を消そうと奔走するがー。ジム・キャリー、ケイト・ウィンスレット共演のスパイラル・ラブストーリー。（「Oricon」データベースより）

23才のときに見ていたら、震えていたに違いない。

失恋の記憶を消去しようとする、カップルの物語。  
少し「パニラスカイ」に似ているな、とも思う。内容は全然違うけど。

25才のときに公開された映画だから観れなかったけど、  
どうして23才のときに観たかったかというと、  
立ち直れないほどの失恋をした直後だったからで。  
おそらくそのときであれば、全身を撃ち抜かれたと思う。

今は、全身を撃ち抜くのではなく、  
むしろ、あたたかい無意識の記憶に、優しくなるほど。

そのことに少し、驚きつつ、  
このところ情熱的な恋をしてないのは、  
いかがなものかと思ったりもする。

おだやかな愛がほしいなと思うのは、  
傷つきながら年を重ねてきたからか。

それさえも簡単に越えちゃうのが、  
「恋」というものだろうけれど。

「いつか私のこと、イヤになるのよ」

「それでも、オーケーさ」

わかってても、オーケーだと言い切れてしまうこと。  
そういうことか。うん、きっとそういうことだ。

新たな発見をした気分にもなった。

ところでこのDVDの発売日が2005年10月28日だった。

勝手に運命めいたものを感じて、  
ひとりにやけるのだった。

## 吉祥寺の朝日奈くん (2011/日本)

---



出演：桐山漣 星野真里

中田永一による同名恋愛小説が初映画化!初春の吉祥寺を舞台に、夢をあきらめた青年が人妻に恋をし、再出発するまでの日々を穏やかに描いた恋愛ストーリー。朝日奈くんは吉祥寺に住んでいる。役者への夢も破れてバイト暮らし。ぼくは、どうしてこの街にいるんだろう?そんな朝日奈の前に、一人の女性が現れー。主人公に訪れるほろ苦くも爽やかな余韻が心に残る傑作。（「Oricon」データベースより）

*「結婚して、人間が一人、誕生するくらいのお愛があったはずなのに、それがいつのまにか消えてなくなっている、というのが、かなしい」*

原作を読んで、映画を見るか、  
映画を見て、原作を読むか。

という選択はよくあるけれど、

原作を読んでいる途中で、映画を見る、  
っていうことは、なかなかない。

そんな、なかなかない選択をして、映画を鑑賞。

そして、小説がなかなか進まなかった訳を、  
ちょっと知ることとなる。

それは、この小説が、エンターテイメントであるからだ。

すこし、ミステリー的というか、  
物語に裏がある、というストーリーで、  
それが、つまり、エンターテイメント。

だから、売れるんだと思うけれど、  
その「裏」に、人の心をもてあそぶ、  
という話の筋があったことが、少しいや。

それがあるから、  
最終的には、「いい話」になるのは、わかるのだけれど。

心を引きつけるには、エンターテインメントが必要だ、  
とも、痛感だけど.....

というのを、踏まえつつ、  
冒頭のセリフ。

「結婚して、人間が一人、誕生するくらいのお愛があったはずなのに、  
それがいつのまにか消えてなくなっている、というのが、かなしい」

かなしいよね。

別にその愛をずっと継続することは望まないけど、  
形を変えてもそこに、その愛の「コア」があってほしいと思う。

人はそれぞれ、たくさんの選択をしながら生きて、  
それをときどき間違えてしまうってことが、ある。

間違えること、それ自体を、  
善悪で判断しなくてもいいと思うけれど、  
間違いだと気付くまでの時間、  
そこに至るまでの経緯、  
その積み重ねの中に、たくさんのヒントはあったはず。

そのヒントに、心を痛めること、  
相手を思いやれなかったこと、が、隠れているのに。

人を愛するってときの、「カタチ」は、  
一個だと決まっていない。

「カタチ」の中にしあわせがあるのではなく、  
しあわせの中に、「カタチ」が作られるのだ。

間違いはたくさんあるけれど、  
忘れてほしくないことは、ある。

人の心をもてあそんでは、いけない。

「カタチ」のために、  
人を、傷つけようとしては、いけない。

人間を一人、誕生させるくらいのお愛を、  
人は持つことができるのだから。

## しあわせのパン (2012/日本)

---



監督：三島有紀子

出演：原田知世 大泉洋 森カンナ 平岡祐太

原田知世、大泉洋主演のハートウォーミングドラマ。北海道でパンカフェ・マーニを始めた夫婦、リエさんと水縞くん。水縞くんがパンを焼き、リエさんがコーヒーを淹れ料理を作る。そこには日々いろいろなお客様がやって来る。(キネマ旬報社データベースより)

「大切なのは、君が照らされていて、君が照らしているということなんだよ」

栗を初めて見た人は、あのトゲトゲの中に、  
実がなっていることを想像できただろうか。

トゲトゲが、何か大切なものを隠しているのだとしたら、  
それは、大切な人にしか見せたくない、想いなのかもしれない。

しあわせはそうやって、  
心の中に埋まっている。

それを取り出して、わけあうこと。

わけたそれを、「ありがとう」と受け取ること。

そうできる相手がいることが、  
しあわせなのだね、きっと。

僕はなるべく、「ごめん」と言わないことにしている。

それは「謝らない」ということではない。  
間違ったり、結果的に誰かを傷つけてしまったときは、  
心から「ごめん」と伝えなきゃいけないと思ってる。

でも、「ごめん」と思いながら、  
抑えきれない何かを伝えたくはない。

わかりやすくいうと、  
「ごめん、こんなこと言って。でも」とか、

「ごめん、傷つけたよね、でも」とか。

それは「でも」が伝えたいだけで、  
本当にごめんと思っていない。

本当に「ごめん」と思うのなら、初めから伝えないほうがいいのだ。

それは「ごめん」と言いながら、殴ることと同じことだ。

そうならないように、僕はトゲトゲの中に、その「ごめん」を隠す。

そしてもし、誰かがそのトゲトゲの中身を取り出そうとしたら、  
「ありがとう」の実をならす。

触れてくれて、ありがとう。

トゲトゲに触れて、痛い想いをさせてしまって、  
それでも取り出してきて「ありがとう」と。

僕はそうやってトゲトゲの中に「ごめん」を隠している人の、  
その中身を取り出すために、痛い想いを繰り返す。

でも、そのことを「ごめん」なんて言わなくていい。

ありがとうの実に触れたら、  
僕は、とてもしあわせになれるから。

それをわけたとき、「ありがとう」と受け取ってほしい。

「大切なのは、君が照らされていて、君が照らしているということなんだよ」

人はときどき、そのことを忘れてしまう。

トゲトゲの中の「ありがとう」は、  
お互いを照らし合う、しあわせの光なのだよ。

## ダーリンは外国人（2010/日本）

---



監督：宇恵和昭

出演：井上真央 ジョナサン・シェア

小栗左多里のコミックエッセイを井上真央主演で映画化。漫画家を夢見るイラストレーター・さおりが付き合っているのは、“漢字”の美しさに一目惚れして来日したアメリカ人・トニー。“外国人なダーリン”トニーの言動は、さおりにとって謎だらけで...。  
（「キネマ旬報社」データベースより）

そういえば昔、森本レオが不倫かなにかで騒がれたとき、それを「異文化コミュニケーション」と呼んでいたなあ、と思い出した。

その行為の是非は置いておいて、ネーミングセンスは抜群だと思う。

外国人と日本人、男と女、人と人。

誰かに関わるということ自体が、「異文化」とのコミュニケーションだ。

生まれたての子どもなら、「世界」そのものが異文化で、だから泣くし、わめくし、おびえる。

でも、異文化だからこそ、笑うし、はしゃぐし、楽しめる。

世界側がだんだんと自分の呼吸と合うようになって、安心し、だけでも、完全に「自分」とは同化しないから、違いが生まれる。

その違いに、寄り添ったり、認めたり、必要とすることが、誰かを愛するってということなんだろう。

こどものころ、なんとなく、大人になれば、結婚して子供が生まれて、家族をもって...ってということになるのだらうと、思ったた。

けれども、「なんとなく」では、そういうことにはならないわけで、だから家族を守っている人たちみんなが、スーパーマンなんじゃないかと、思うときがある。

みんな、すげー。

いろんなもんを乗り越えてんだなーって。

ものすごく俺は甘っちょろいっす。

それでも誰かを「愛する」想いを持っている。

もしかして誰かからみれば、  
それもまた「スーパーマン」だったりすることだったりして。

ときには誰かを傷つけてしまったり、  
ときには誰かをすくったりするのは、  
みんながみんな、それぞれちがう「人」だからなんだろう。

せめて愛しているものを、  
守り続ける力が消えませんが。

それを強くあたたく灯すだけだ。



## 幸福な食卓（2007/日本）

---



監督：小松隆志

出演：北乃きい.勝地 涼.平岡祐太.さくら.羽場裕一.石田ゆり子

第26回吉川英治新人文学賞を受賞した瀬尾まいこのベストセラー小説を、講談社「ミスマガジン2005」グランプリの北乃きい主演で映画化!「父さんは、今日で父さんを辞めようと思う」。家族四人が顔を揃える朝の食卓で父が口にした意外な一言。それは3年前から歯車が少しずつ狂い始めていた佐和子の家族に、新たな波紋を投げかける。中学生生活最後の1年を迎えた佐和子。いったい、どうになってしまうのか!?(「Oricon」データベースより)

この映画を観てから、原作を読むとより深く味わえるでしょう。  
でも、原作で号泣してしまったぼくには、映画はちょっと物足りなかった。

だってさあ、坂戸君が出てこなくて、それを大浦君が言ってしまうなんて、  
ちょっとずるいよ。

坂戸君とは、転校生で、主人公である佐和子に大事なことを気づかせてくれる人。  
大浦君とは、バカで不器用なゆえ、佐和子の心の支えになる彼氏。

大浦君が坂戸君の台詞を言ってしまうなんて、  
大浦君、いいとこ取りすぎだろ。

坂戸君は坂戸君で、ちゃんと役割があるんだから、  
大浦君がそれをとっちゃ、ちょっと困る。

主演の北乃きいが可愛いから、許してやるか。

なんて、坂戸君にこだわりを見せるわけは、  
ぼくが、大浦君ではなく、どちらかという、坂戸君タイプだからだ。

佐和子の彼氏になれるのは、大浦君だから、  
ぼくは佐和子の彼氏にはなれないなあと思う。

でも、坂戸君のように、ちょっとは役に立つ存在ではいられるような気がする。

それを大浦君が持ってたら、  
坂戸君、ほんとにいないじゃん。

あー、悲しい。

まあ、北乃きいが可愛いから、許してやるか。

原作者の瀬尾まいこさんの作品は、  
映画やドラマになっても、小説を超えられないな。

あんなに丁寧に人の心を描くことは、  
瀬尾さんの言葉じゃなきゃ、無理なんだろうね。

映画がダイジェストの感じに、ぼくには見えてしまった。

改めて、瀬尾さんのすごさを思い知った。

北乃きいが可愛いから、許すけどね。

## リンダリンダリンダ (2005/日本)

---



監督 : 山下敦弘

出演 : ペ・ドウナ 前田亜季 香椎由宇 関根史織 三村恭代

制作 : 山下敦弘 向井康介 宮下和雅子

文化祭前日に、韓国人留学生がボーカルのバンドを結成した女子高生たちが、ブルーハーツを演奏する物語を描いた青春ドラマ作品。ペ・ドウナ、前田亜季、香椎由宇、関根史織ほか出演。

(「Oricon」データベースより)

す れてるのか、すれてないのか、いや、実は、純なのか。

文化祭、女子バンド、留学生、少しの恋。  
ゆえに、青春ど真ん中のストーリー。

なのだけど、疾風怒濤の青春感ではなく、  
せつなすぎる青春感でもない。

あ、このまったり感こそ、  
実はリアルな青春の世界だ。

そんなことをぼくは思う。

思い出したのは、  
こういう感じの映画が、学生時代好きだったということ。

そうだ、このまったり感の中にある、  
どうにもできないもやもやするのが、  
リアルに青春してるやつの雰囲気なのだ。

ものごとは、きれいに運ばないし、運べない。  
でも、突き抜ける何かがあると、実は信じてたりする。

振り返って描く青春は、きれいになってしまうが、  
(疾風怒濤だったり、せつなすぎることは、きれいなことだ)

最中の青春は、きれいでも汚くもなく、  
ただそこに横たわっているだけなのだ。

そこに、「リンダリンダ」ときた日にゃ、  
そりゃあもう、心はつかまれてしまうわけで。

正直、ブルーハーツを女子高生が歌ってるだけで、  
グラグラと、ゆれまくるのなんのって。

「僕の右手」を必死で覚える、韓国人留学生役のペ・ドゥナに、  
やられてしまったわけで。

香椎由宇をはじめ、すれてんのか、すれてないのか、  
わからずじまいなのだけど、  
このまったり感の中では、ただ、リアルで純だと、  
青春が通り過ぎたぼくは思うのだけど。

だとすれば、女子の青春って、ああいう感じなのかな。

静かに、まったり、でも揺れる揺れる。

大人になっても、この感じ、まだ好きだった。

## 時をかける少女（2010/日本）

---



監督：谷口正晃

出演：仲里依紗 中尾明慶

不朽の名作『時をかける少女』のその後の物語を描いた実写映画。2006年に公開されたアニメ版でヒロインの紺野真琴の声を担当した仲里依紗が主演を務める。高校卒業を間近に控えた芳山あかりは、交通事故に遭った母・和子の願いを叶えるため、過去の時代にタイム・リープしようと決心する。ところが飛ぶ時代を間違えてしまい、そこで映画監督志望の涼太と出会うことに…。 （「Oricon」データベースより）

初めて会ったのに、懐かしい感じのする人。  
初めて行ったのに、帰ってきたような感じのする場所。  
初めて聴いたのに、探し求めていたような歌。

そういうのって、ありませんか。

それって、記憶を越えたどこかで、  
つながったことのある出会いなのかもしれないなあ。  
そんなことを思ってみる。

それって、愛なのかもしれない。

記憶になくても、想いには残っているような。

それは、  
かつて大切にしていたものが、  
いまは大切じゃなくなったとしても、  
それが血となり肉となって、  
心を形成していくということ。

大切なものが、大切じゃなくなるのは、儂い。

だからこそ、大切であれるとき、  
すべてを伝える、すべてを感じる、  
伝えきったら、もう忘れてもいいと思えるくらいに。

そして時をこえていつか、わかったらいい。

愛だと。

そのときまで、未来で待ってる。

## おっぱいバレー（2008/日本）    ぼくたちと駐在さんの700日戦争（2008/日本）

---



監督：羽住英一郎

出演：綾瀬はるか 青木崇高 仲村トオル 石田卓也 大後寿々花

美人女教師のおっぱい見たさに猛練習に励むバレー部員たちの奮闘を描いた、綾瀬はるか主演の青春コメディ。新任教師・美香子はバレー部の顧問を任されるが、部員は全員ダメな輩ばかり。そんな彼らを奮起させるため、美香子は彼らにある“約束”をする。（「キネマ旬報社データベースより」）

### 「ぼくたちと駐在さんの700日戦争」

監督：塚本連平

出演：市原隼人 佐々木蔵之介 麻生久美子 石田卓也 加治将樹

制作：ママチャリ 福田雄一

大人気ブログ小説を原作とした、市原隼人主演の青春エンタテインメントムービー!イタズラを仕掛けることに生きがいを感じていたママチャリ率いる7人は、ある男の出現により、存在が脅かされることに。その男こそ、国家権力の下で正義を守るべき公務員の駐在さんで、言語道断の問題大アリな日本一大人気ない男だった!?（「Oricon」データベースより）

1979年って、平和だったんじゃないだろうかと考えている。

調べてみると、オイルショックやスリーマイル島原発事故など、何かしらの社会危機的なできごとはあった。

けれど少なくとも、思春期の男子が、「イタズラ」や「おっぱい」に全力を注いでいられた時代ということだ。

「ぼくたちと駐在さんの700日戦争」と「おっぱいバレー」、ともに1979年の中高生男子の実話をもとに作られた映画。

その1979年に生まれたぼくも、その後、幸運なことに平和の中に身をおいてこられたのだけれど。

だから、このバカバカしさに全力を尽くす感じが、愛しくさえある。

駐在さんと仕掛け合うイタズラも、おっぱいが見たいがためにがんばる部活も、本当は別に「理由」が必要なわけじゃない。

ただ、なんだかわからない目の前のもやもやを、キラキラに変えたいがための全力なのだと思う。

果してぼくはあの時代に全力を尽くしたのか。

もやもやを、もやもやのまま、  
置いてきてしまったような気もする。

だから、普遍的な青春を観たくなるのかも。

もやもやの中で思うことを、もうひとつ。

おおまかに人生を分けるとすると、  
女性には子供を産める構造を体の中に持っていて、  
それを実現することは、一つの目標になりえると思う。  
社会的にも、それは望まれてるとも言える。  
(実現するかしないかは、別の話で、いいも悪いもありません)

男は子供を産めない。  
子供を産むことを目標にはできない。

代替りの目標は、きっと、  
誰かのための「赤レンジャー」になること、ではないだろうか。  
(ゴレンジャー世代ではないけど、わかりやすい例として「赤レンジャー」にします)

つまり、この大きな世界では、  
「赤レンジャー」どころか「黄レンジャー」にすらなれないかもしれないけれど、  
大切な人を守りたいと思う気持ちが必要だ、ということ。

もやもやを、もやもやのままにせず、  
キラキラに変えるための、全力。

それは「赤レンジャー」への修行なのだ、きっと。  
たぶん。おそらく。そんな気がするだけかもしれないけど。

1979年にもやもやしていた男子は、  
その瞬間でさえ誰かの「赤レンジャー」になった。

1979年に産声をあげたぼくらは、どうだろう。

「桃レンジャー」をゲットしたかい？

そんな話を同級生としてみたい、このごろだ。

## 神様のパズル (2008/日本)

---



監督：三池崇史

出演：市原隼人 谷村美月 松本莉緒 田中幸太郎 岩尾望

角川春樹がエグゼクティブプロデューサー、三池崇史が監督を務めた青春パニックムービー。落ちこぼれ大学生と孤独な天才少女が、“宇宙創生”の立証に挑む。『ぼくたちと駐在さんの700日戦争』の市原隼人と『リアル鬼ごっこ』の谷村美月が共演。（「キネマ旬報社データベースより」）

市原隼人に似た友達がいる。

佇まい、思考の仕方、しゃべり方など、市原隼人を見ていると彼のことを思い出す。

彼とは、半年しか一緒に過ごしていない。ある意味、半年だから濃い付き合いができたのだとも言える。

彼とぼくは、ぼくと市原隼人がまるで違うのと同じように、考え方や行動の仕方が、まるで違った。

けれど、彼はぼくを慕っていたし、ぼくも彼と話すことが好きだった。

思えば、26才以降のぼくは、自分と違うタイプの人と関わるが多くなった。それはたまたまでもあるし、自分からそれを望んだとも言える。

そして、その違いの中から、自分の存在のあり方を、見つけ出したような気がする。

外国で暮らすと、日本人であることを日本にいるとき以上に感じるというが、おそらく、そういう感覚に近いんじゃないかと思う。

自分と違うことでぶつかることも多かったけれど、その違いを、ぼくと彼は、心から楽しんだ。

彼と別々の道を歩むことになったとき、握手をしながら彼は言った。

「また逢いましょう、地球で」

世界中を旅するような彼なので、「地球で」逢うことは間違いない。

宇宙のことをよく語る彼だったので、市原隼人が宇宙のことについて、



「わからないながら、語る」その姿がまた、彼そのものようだった。

地球で、逢えるように、  
いつまでも地球があるといい。

そう思えるのは、彼だけではなく、  
死ぬまでの間に、逢いた人が、いるからだ。

逢いたい人に会えた時は、  
ジャジャジャーンと「運命」を響かせるな。

八分休符を刻む前、「歓びの歌」を響かせろ。

その意味は、映画を観たら、わかります。ニヤッ。

## ハチミツとクローバー（2006/日本）

---



監督：高田雅博

出演：櫻井翔 蒼井優 伊勢谷友介

美大を舞台に竹本、はぐ、森田、真山、あゆの5人の若者が繰り広げる、淡く切なくリアルなラブストーリー。片想いの楽しさと、みんなと笑い転げるキラキラした瞬間を切り取り、主人公たちの揺れ動く心を繊細なタッチで描き出した青春恋愛映画の決定版。（「Oricon」データベースより）

俺もちゃんと、青春してた。

海に向かって叫んだり、  
吐くまで飲んで、笑ったり、  
好きな人の手を握りしめたり、  
押し倒したり、泣かせて自分を責めまったり。

たり、たり、と思ってたら、  
YOSHII LOVINSONの「TALI」が浮かんできたり。

生きることは、無常だと思っている。

いいことも、いやなことも、  
はじめたものは、終わって、  
終わったものは、はじまる。

形をいろいろ変えながら。

いつまでも大切だと思っていたことが、  
それほどでもないものになってしまうこともあるし、  
何とも思っていなかったことが、  
キラキラしたものになっていくこともある。

恋とか、人を想う気持ちっていうのは、  
そういうことなのだ。

心から人を好きになったり、  
心から人を想っているときに、  
きっと、それを忘れてる。

忘れてしまって、ただ、想いを解き放っている。

だからこそ、そのときの記憶は、苦い想いを抱きつつ、  
キラキラと宝石のように光に満ちているのだ。

無常だと言いついて聞かせていても、  
突き動かしてしまえるもの。  
結局、そんな想いを、隠し持っていたいと思ってしまう。

たとえそれが、  
届かない想いの、連鎖であってもだ。

暗闇の中で見た光は、  
"いつまでも"忘れない。

無常を信じる俺は、  
そんな、真逆の想いを隠し持っている。

ところで「はぐみ」って、漢字にしたら、  
「育美」とかかなあ。

「HUG」を連想させるし、  
子供がいたら、つけたい名前だと、思った。

## 傘 (2008/日本)

---



監督: たかひろや

出演: 窪岡瑞希 菜葉菜 河合龍之介 佐藤勇真

テレビ埼玉開局30周年を記念して製作された青春ドラマ。農家の息子である晴とミス深谷の真美は、何となくいつも一緒にいるが幼馴染み以上の関係に発展しないまま過ごしてきた。しかしある日、真美が東京に行くかもしれないと言い出し...。(「キネマ旬報社データベースより」)

このまえ、駅伝の中継を見たのだけど、  
「ここって、埼玉っばいなあ」と思ったら、案の定、埼玉だった。

そこは地元ではないのだけど、  
道路やガードレールの感じとか、お店や風景の感じで、  
埼玉だと、すぐにわかった。

ぼくは地元の埼玉を愛している意識はそこまで大きくないけど、  
そういうことをわかるっていうことは、  
その文化が体には残っているのだと思う。

ということで、埼玉県北地方のご当地映画、「傘」。

県北には、あまりなじみがないのだけど、  
それでも、映し出される風景は、「埼玉県」だなあと思う。

ありふれた高校生の日常。

深谷、本庄、熊谷あたりが舞台になっている。

なんというか、よくも悪くも教科書的な映画だと思った。  
「起承転結」ってこういうこと、というのがよくわかるような。  
ストーリーも、驚きはない。  
山場はあるけど、風のように、さらさらとしている。

それが物足りないというのもあるだろうけど、  
今のぼくにはちょうどよかったというか。

肩肘張らずに、すーっと観れる。  
3時のおやつみたいな、そういう感じ。

そういう狙いで作ったわけじゃないと思うけど。

あ、もしかして。

人にとって故郷は「3時のおやつ」みたいなものじゃないかと。

学生時代の血気盛んなときには、  
その「3時のおやつ」のような空間が、  
ただの退屈にしか感じなかった気がするけれど。

時間を経て、そこを休息の場にするのか、  
それとも夕食の場にするのか、  
人は選んで生きていくことになる。

どちらも正解なんだろう。

コーヒーを淹れながら、そんなことを考えた。

## すべてには海になる (2010/日本)

---



監督：山田あかね

出演：佐藤江梨子 柳楽優弥 要潤

書店員の夏樹(佐藤江梨子)が自分の経験を反映して作った独自の本棚が好評を呼び、その本棚に魅了された客で店内はにぎわっていた。

ある日、その中の客で中年の女性が事件を起こし、それが縁で夏樹は彼女の息子、光治(柳楽優弥)と出会う。光治も本を支えに生きていることを知り、二人はかけがえのない関係になっていく。

もしAならばBである。

ドイツの哲学者、イマニエル・カントは、その法則のことを「因果律」と呼んだ。

おいしそうなスイーツが目の前にたくさん、ある。だから、食べる。

というのは、カントからすると、「因果律」に支配された、自由のない行為。

では、自由とは？

その中から、本当に必要なものを選んでいくこと。それが、欲望から解放された、自由な心。と、ぼくは理解している。

裸の女が目の前にいたら、抱く。

それを我慢することは、男にとっては、驚異的な自制心を要すること。ましてや、それが好きな人なら、なおさらに。

後悔や自責の念を抱きながらも、その「因果律」に負けない自由を手にすることが、本当はもっと、重要なことだったのだ。

かつては、そうだったよなあ、と思ひ出す。

「海が聞こえる」の森崎拓がそうだったように、「天国はまだ遠く」の田村さんがそうだったように。

はたまた、「最高の人生の見つけ方」のモーガン・フリーマンがそうだったように。

物語には、ヒカリを感じたいと思っているぼくは、  
高校生役の柳楽優弥の「自分の大切なものを信じる力」に、  
そのヒカリを見た。

そうだよ、欲望じゃなくて、  
つながる「気持ち」を大切にしかったんだ。  
その上に重なる体が、幸福をくれていたのだと。

大人は自分勝手だけれど、  
絶望していない、大人でありたい。

ブータン国王も言っていたじゃないか。

経験を食べて大きくなる心の中の龍を、  
自分自身でコントロールできるようにならなければいけない、と。

おっと、ちょっと脱線。

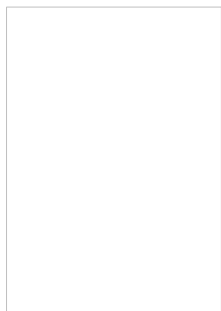
そして、書店員役の佐藤江梨子のセリフにも、光が。

「売れなくても、本当のことが書いてある本が必要な人もいると思うんです」

愛のわからない人へ、言葉の隙間には、愛があることを伝えたい。

## 今度の日曜日に（2009/日本）

---



監督：けんもち聡

出演：市川染五郎

日本の大学に留学するあこがれの先輩を追って、映像の勉強をするため日本にやってきたソラ(ユンナ)。しかし、肝心の先輩は家庭の事情で帰国しており、落胆した彼女は勉強もはかどらない。そんなとき、3つの仕事を掛け持ちしている中年男・松元(市川染五郎)と出会い、彼に興味を覚えたソラは松元を課題の被写体にしようと思いつく。

チェ・ソラ。

その役名が、こだまする。

片親の韓国人留学生と、  
びんを集める、謎の用務員のおじさんとの、  
心の交流の物語。

チェ・ソラ。

その名前だけで、星4つ。

そして、びんよりもきらきらとひかる、  
胸の奥のたいせつな、きらきらを感じて、

星5つ。

『リングダリングダ』のペ・ドゥナみたいに、  
チェ・ソラ役のユンナに、きゅんとくる。

K-POPアイドルのそれじゃない、  
完璧じゃないキュートさが、たまらなくキュート。

用務員のおじさんが、  
完全な丸じゃないびんの口に、  
たまらなく愛しさを感じるのと、同じような。

ユンナが良いだけの書き方だけど、  
そうじゃなくて、本当に物語が素敵。

せつないけれど、希望がたくさん、つまる。

おごましい言い方だけど、  
ぼくが書く小説が好きなのは、きっと好きな映画。  
なぜなら、ぼくは、こんな話を書きたいから。



それにしても、チェ・ソラ。

もうこの映画のユンナは『チェ・ソラ』にしか思えない。

たとえばぼくが大学生で、  
チェ・ソラが同級生にいたならば、  
絶対に好きになる。

ああ、でも、チェ・ソラのかげがえのない人は、  
用務員のおじさんなんだなあ、と、  
せつない思いに浸るに違いない。

あ、妄想に走っていましたが、すみません。

とにかくぼくは、  
「恋愛じゃなくてもつながれる、かがえのない絆」  
というのが、人生のテーマなのだと思っているわけで。

それを教えてくれた人に、  
ありがとうと、伝えたくなる、そんな映画でした。

## モーターサイクル・ダイアリーズ (アメリカ・イギリスetc)

---



監督:ウォルター・サレス

出演:ガエル・ガルシア・ベルナル ロドリゴ・デ・ラ・セルナ ミア・マエストロ

制作:ホセ・リベラ

学業もほぼ修了となった医学生のエルネストと、親友のアルベルトの二人が出掛けたバイク旅行を中心に描いた青春映画。  
。(「Oricon」データベースより)

正直に言うと、革命家のゲバラについては、あまり興味が持てない。  
社会的弱者のために、革命を起こした人物、ということくらいは、わかるのだけど。

サッカーの試合のゲーフラ(ゲートフラッグ、両手で持つ旗)や、Tシャツのデザインになっていたりする人、という印象のほうが、はるかに強い。

という程度の、ゲバラ初心者にしても、この映画に関しては、すごく興味を持たされたわけで。

それはどうしてかというと、まだ医大生だったころのゲバラの、青春の記録だったからなのだと思う。

年上の友人と、中古のバイクで、南米を旅する。はるか12000キロのその旅で、ラテンアメリカの現実を目のあたりにし、ゲバラの心は確実に変化していく。

その後、革命家になったことを考えると、それは壮大な出来事のように思うけれど、そうではなくて。

たぶん、旅をする誰もが、心の変化を望んでいる、ということ、思わずにいられない。

日常を暮らす、当たり前、一般的な人間だって、そうやって、[自分にとっての何か]をつかむ旅をするのだ。

そのレベルが、大それたものでないとしても、自分にとって、何が大きな問題かを知ること、これからの自分は決まっていく、ということだ。

とりわけ、まだ革命前夜のゲバラが、想いのままに、対岸へと泳いでいく場面には、グッときた。

あの気持ちだよな、[決めた]という瞬間の、  
あの、溢れ出すような気持ち。

若さはそれを許してくれるけれど、  
若くなくなってって、それはどう変化していくだろう。

また違う、[溢れ出すような気持ち]が、  
心を包んでいく、ということもあるのだけれど。

男はそれでも、やっぱり冒険がすきなのだ。

ゲーフラやTシャツになってしまう訳が、わかる。

そんな青春放浪記だった。

## 君に届け(2010/日本)

---



監督:熊澤尚人

出演:多部未華子 三浦春馬

椎名軽穂原作コミックを映画化。長い黒髪と陰気な見た目のせいで「貞子」と呼ばれ、クラスメイトから避けられてきた黒沼爽子が、高校に入学して、明るく爽やかで男女問わず人気のある風早翔太と同じクラスになったことで勇気ももらい、友達をつくり、恋をしていく姿を描いた学園青春ストーリー。多部未華子、三浦春馬ほか出演。（「Oricon」データベースより）

「君」という存在や「届け」と願う想い。

そういうの、どんどんなくしていったらなあ、  
胸の奥がチクリと痛くなって、泣けてきた。

てっきり、イケメンと暗い女の子の恋の話だとばかり思っていたけれど、  
そんなに浅い話じゃないとわかって、感動してしまった。

友達って？ 付き合うって？ 特別って？

青い心のおかげだからこそ、  
そのひとつひとつに丁寧に向き合って、  
傷ついたり、救われたりする、その感じ。

青春って、一言でまとめちゃえば簡単なんだけど、  
それだけにしたくないような、丁寧な心の動きの描写。

これって何かに似ているなあと思ったら、  
瀬尾まいこさんの小説のようだと気がついた。

瀬尾さんはたぶん、こんなにまっすぐな恋愛小説は書かないと思うけど、  
「君に届け」の丁寧な心の揺れの描き方は、瀬尾さんのそれによく似ている。

たとえば、心表現することが苦手な主人公の爽子が、  
友達を「好き」とは言えないところ。  
好きと言うよりも、もっと大切だと思う気持ちを、隠してしまう、  
そのもどかしさ、とか。

たとえば完璧に爽やかな風早くんが、爽子の前では、  
その想いが伝わってるのかどうかわからなくて、  
不安になっていくところ、とか。

あれ、これは見ていて恥ずかしくなるような恋愛映画じゃないぞ、  
と、予想外な気持ちになったのだ。

それはたぶん、「君」という存在、「届け」という願いが、

ただただ、まっすぐにあるからなんだと思う。

それにしてもなあ……

「他のことなんかどうでもよくなっちゃうくらいに特別に大切なこと」

恋愛もそうだろうけど、  
自分の子供には、そんな気持ちになれるんだろう。

それが「他の子となんかどうでもよくなっちゃうくらいに特別に大切な君」  
の、その先のこと、なら、世界はあっというまに平和になる。

そんな気がしてる。

まあ、こんなこと書いている僕が、恥ずかしいかもしれないな。

## 僕たちは世界を変えることができない。(2011/日本)

---



監督：深作健太

出演：向井理 松坂桃李 柄本佑 窪田正孝 リリーフランキー

カンボジアに小学校を建てるというボランティア活動を思いつきで始めた大学生たちの姿を描く青春ドラマ。海外支援案内のパンフレットを見つけた甲太は、サークルを立ち上げ現地にスタディツアーに行くことに…。(「キネマ旬報社データベースより」)

世界を変える力がないとしても、  
いつのまにか自分自身が変わる、  
ということは、ある。

自分自身が変わり始めると、  
見える世界も変わる。

その世界に「hello」と言うと、  
世界は「hello」と返してくれることも、ある。

何かが足りないと思いながら毎日を過ごす、医大生が、  
カンボジアに小学校を建てようと、奔走する物語。

原作がノンフィクションだけあって、  
カンボジアの現状などが、リアルに描かれる。  
それを知るだけでも、心の景色は変わる。  
直視するとえぐられてしまうほどの過去も、  
「知る」ことから、世界は動き出す。

「若い」ってことが、有利なのは、  
何かをしたいと思ったとき、  
それを踏み留ませる理由が、少ないってこと。  
そして、その想いが世代の中に漂っている、ということ。

年をとっても、いくらでもやりたいことはやれるけれど、  
それと同じ空気感を同世代の中に見つけるのは難しくなってしまう。

踏み留まることのできる価値観の方が、  
上の世代になるにつれ一般的になるからだ。

迷いながらも突き進むその渦が、  
若い世代になるほど、大きなうねりを生む。

どでかいことでも、ちっぽけなことでも、  
人はそれぞれにその「うねり」を通していくのだ。

そのとき、それぞれの世界は変わっていく。

だから「hello」と声をかけよう。

そこで世界は、待っているのだ。

雨や風の中でも「青空」になる日を。

## 桐島、部活やめるってよ

---



監督：吉田大八

出演：神木隆之介 橋本愛 大後寿々花

バレーボール部キャプテンで学校内の誰もが認める“スター”桐島が退部をした。彼女さえも連絡がとれずその理由を知らされぬまま、校内のあらゆる部活や、クラスの間関係が静かに変化していく。そんな中、桐島に一番遠い存在だった“下”に属する映画部の前田(神木隆之介)が動きだし、物語は思わぬ方向へ展開していく…。(「Oricon」データベースより)

「学校」という、ちいさな箱の中で、  
自分がどの位置に属しているか、  
ということは、高校生くらいになると、残酷なほどに、明確になる。

その箱の外から眺めると、  
イケてる(と、されてる)ことが上なわけでも、  
イケてない(と、されてる)ことが下だというわけでもない、わかる。

でも、箱の中では、その「上」や「下」という意識が、  
より、際立つようになっている。

それは、「上」であっても「下」であっても、  
虚勢をはることで保たれる幼い心があるからだ。

思い起こせば自分だって、  
誰かには「上」だと思ったり、違う誰かには「下」だと思ったり、  
そんなふうに、「位置」に敏感だった記憶がある。

で、「下」とされている映画部の前田よりの気持ちで観てしまうってことは、  
自分が、そっちに近かった、ということのような気がする。

けれど、「上」とされている、桐島の親友、宏樹が、  
前田に対して、自分の「足りなさ」を感じている。

そうなら、やっぱり「上」も「下」もない。

イケてようが、イケてなからうが、  
自分の想いを、大切に強く持っているってことが、  
人それぞれの輝きなのだ。

まったりとはじまって、まったりと終わるかと思いきや、



その輝きを目の当たりにして、思わずグッときた。  
やっぱり、「上」だけで織りなすことのない、リアリティが、  
人間の嫌な部分とキラキラする部分と、どうでもいい部分を中和している。

女同士の駆け引きとか、  
クールに見える友情とか、  
思わせぶりの態度とか、  
ささやかな反抗とか、  
スカウトも来てないのに、ドラフトまで引退しない、先輩とか。（個人的にはこれが好き）

そういう、ドラマチックな話じゃないところが、  
文学っぽいなあと、妙に納得した。

原作も読んでみよう。

どうやら、映画を観る→原作を読む、  
っていう流れのほうが安心して読めていいみたいだ。

## ゴールドスランバー (2009/日本)

---



出演：堺雅人 竹内結子 吉岡秀隆 劇団ひとり 香川照之

伊坂幸太郎のベストセラー小説を、堺雅人ほか豪華キャストで映画化。杜の都・仙台。野党初の首相となった金田が凱旋パレードの最中に暗殺される。同じ頃、大学時代の友人・森田から現場付近に呼び出された青柳は、突如現れた警官に拳銃を向けられ...。（「キネマ旬報社データベースより」）

□ ックだ。

ぼくはメンタルの弱い男だ。

怒られたり、嫌なことがあったり、  
予定外のことがあったりすると、  
すぐに動揺してしまう。

でも、動揺してないフリをする。

冷静な顔をしてみせるけれど、  
心の中はバクバクしてたりする。

それが嫌いで、  
あえて茨を選んでみたりする。  
そうしたら強くなるかもしれないと思って。

だけど、強くならない。  
結局、いつもバクバクしてる。

バクバクしてないフリだけ、  
うまくいった気はするけれど。

というわけで、ゴールドスランバーを観てる間は、かなりバクバクしていた。

バクバクしながら、「信頼し合うことは、どれほど尊いものか」と考える。

信頼って、はじめからあるものじゃない。  
生まれた瞬間だって、本能的には親を信頼していると思うけど、  
それもそのあとの態度一つ一つで、信頼できると確信していくのだ、おそらく。

血のつながりがあっても、そうなのだから、  
他人と信頼を分け合うことは、並大抵のことじゃない。

そう考えると、そういう絆のある関係は、  
たくさんいなくてもいいかもしれないと思う。  
たくさんいたら心や体がもたないのかもしれない。

だから、犯人に仕立て上げられた主人公に、  
「おまえ、やってないんだろ」  
と、主人公の会社の先輩があっさり言うシーンで、  
ぼくは泣いてしまうのだ。

ぼくなら、26才の時に会った親友には、  
そんなふうで、いられるんだろう。

そのことに、何の疑いもない。

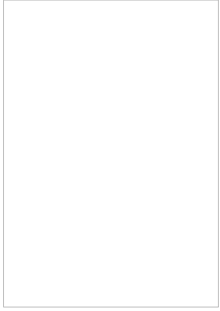
何かを疑わないことで、傷を負うことがある。  
何かを疑わないことで、救われる傷もある。

無様でも生きてることは、カッコイイ。

そう、思わずにはいられない、映画だ。

## フライング☆ラビッツ（2008/日本）

---



監督：瀬々敬久

出演：石原さとみ 真木よう子 渡辺有菜 滝沢沙織

石原さとみと真木よう子共演の青春スポ根ムービー。期待に胸を膨らませて航空会社に入社した新米CA・早瀬ゆかり。ところが、ありえないミスのおかげで、彼女は会社のバスケットボールチーム「JALラビッツ」に半強制的に入部させられてしまう。

このままでいいんだけどさあ。

27才の女友達は言った。  
彼女は今の生活がとても充実しているという。  
仕事、趣味、夢、  
思い通り満たされてとても幸せだと。

「けどねえ、まわりは結婚したり、恋したり、  
ちゃんとしてるんだよねえ。  
わたし、全然、そういうのがないんだけど、いいのかなあ。  
恋愛スイッチOFFしっぱなしなんだよねえ。  
それで全然平気なんだけどさあ」

という話を聞いていたら、この映画を思い出した。

CAになりたくてJALに入社した新人社員が、  
バスケット経験ながら、バスケット部にスカウトされて、  
活躍しちゃう話。

彼女はラーメンもチャーハンも食べたいので、  
いつも必ずセットで食べる。  
仕事とバスケットで忙しくなった彼女に、彼氏は、  
「おまえのラーメンとチャーハンはもう、埋まっちゃってる」  
と、言う。

（あ、”仕事とバスケットがあるから俺は必要ないだろ”、という意味ですよ）

まだ彼氏を好きな彼女は戸惑いながら、答える。

「わたしはラーメンもチャーハンも食べたいの！あなたは……別腹よ！」

ということを27才の女友達に話したら、  
「別腹かぁ。それならスイッチONにしてても大丈夫かもねえ」  
と、笑った。

お腹いっぱい幸せでも、  
別腹でしか満たせない幸せが、あるかもね。

君に、別腹が見つかりますように。

ところで、この映画で何度か歌われるんだけど、  
「アンパンマンのマーチ」は、やっぱりいいね。

なんのために生まれてなにをして生きるのか  
答えられないなんて そんなのは嫌だ

いまを生きることで あつい ところ もえる  
だから君はいくんだ ほほえんで

密かな人生のテーマソングかも。

## スクール・ウォーズ HERO (2004/日本)

---



監督：関本郁夫

出演：照英 和久井映見 内田朝陽 SAYAKA 里見浩太郎

制作：山口良治

感動の実話を映画化した「スクール・ウォーズ HERO」をパッケージ化。荒廃したある高校のラグビー部を舞台に、元全日本代表の熱血教師と部員達の真実の愛と信頼を描く。照英、和久井映見、SAYAKAほか出演。（「Oricon」データベースより）

## 時

代のせいに、すんな。

中学2年のときのこと。

風邪を引いて休んでいたぼくが、  
布団の中からふと、テレビのリモコンのスイッチを押すと、  
「スクール・ウォーズ」というドラマが流れた。

それは再放送で、その当時でさえ、古い映像に見えたのだけれど、  
そのとき、ぼくはそのドラマにハマリ、次の日からは録画予約をした。  
それを学校から帰って観るのが、ぼくの日課となった。

あのときから、14、5年経っても、「やっぱりいいなあ」と思ってしまうのは、  
ぼくの心の真ん中は、まだ変わっていないということだろうか。

たぶん、そうなんだろうな。

だって、演技が下手だなあとか思いながらも、  
今だったらありえねーよなーとか思いながらも、  
結局、泣いてしまうんだもん。

そこに郷愁が少しあるとしてもね。

なんたって、照英さんが素晴らしい。  
だって、演技してると思えないもん。  
きっと、ほんとに泣いてるし、ほんとに喜んでる。

まんまの心を表現できること人間性に、泣いてしまうのだ。  
まんまの心を表現できる人はなんて美しいことか。

どんな時代であろうと、教育に必要なのは、  
その「まんまと心を表現できる力」じゃないかなあ。

シンプルなことほど、大人になると、難しくなる。  
それはぼくもそうで、シンプルなことを難しそうに言ってしまうたりする。

でも、難しそうに言おうが、シンプルに言おうが、  
それがその人にとって、まんまと心を表現できていて、  
その相手にとって、それが伝わっているのなら、  
それが、愛だ。

その愛が、人を育てていく。

変わっていくことは、当たり前。  
でも変わらないものを感じたりも、できる。

だから、時代のせいに、すんな。

14の自分にさえ、教えてもらえることは、ある。

## ひゃくはち (2008/日本)

---



監督: 森義隆

出演: 斎藤嘉樹 中村蒼 市川由衣 高良健吾 北条隆博

甲子園常連校の補欠部員にスポットを当て、彼らが抱く挫折や葛藤、友情などを描いた青春ドラマ。京浜高校野球部に所属する雅人とノブは、高校最後の甲子園出場を懸けて練習に励んでいたが、夏の大会を前に有望株の新入生が入部して... (「キネマ旬報社データベースより」)

**野**球をやっていなかったら、ただのチャライ高校生の話。

小説を読んだときと、やっぱり同じ嫌悪感を感じてから、それでもいつのまにか引き込まれた。

レギュラーではなく、ベンチに入れるかどうかの補欠を描くことで、陽の当たらない存在を照らしているが、結局は「イケてる高校生」だということ。勝利至上主義で、スパルタ指導をする名門校監督。だけど実は生徒のことを理解しているんだという感じ。

おそらく、リアル。

そのリアルさが嫌というか。

甲子園という光の影で、どれだけ子供が犠牲になっているかということも実は感じてしまうから。

嫌なんだけど、端々に映し出される、青春のバカさとかもどかしさというものに、結局引き込まれてしまうのだった。

人間の煩惱の数だけ、縫い目がある野球のボール。

煩惱だらけのそのボールを、  
煩惱だらけの高校生が追いかける。

バカな指導者は多いけれど、  
バカに負けず、球児はよくやってるわ。



やっぱり、おまえら、イケてるよ。

## 国家代表!? (2009/韓国)

---



監督:キム・ヨンファ

出演:ハ・ジョンウ ソン・ドンイル キム・ジソク キム・ドンウク チェ・ジェファン

冬季オリンピック誘致のため、韓国では急遽スキージャンプの国家代表チームを結成することに。しかし、集まったのはジャンプ未経験の落ちこぼればかりだった…。韓国初のスキージャンプチームの実話を元にしたスポーツコメディ!ハ・ジョンウ、ソン・ドンイルほか出演。（「Oricon」データベースより）

ジャマイカ代表ボブスレーチームの「クールランニング」。  
女子高生カーリングチームの「シムソンズ」。

ともに素人ながら、オリンピックにまで上り詰める実話テイストの作品。

この作品も、そのテイスト。

日本中が「船木い～」と祈っていたころ、  
その裏で、スキージャンプ競技、初出場の韓国代表チームの歴史も動いていた。

団体戦が夜に行われていたり、  
実際の記録ではない距離を飛んでいたり、  
フィクションな部分は多々あるだろうと推測できる。

それでも、それはあまり重要なことではない。

今でもそうらしいのだけど、  
韓国のスキージャンプ人口はなんと、10人にも満たないらしい。  
長野オリンピックに参加した選手は、ほとんど初心者。

それは事実であり、  
その挑戦の意味が、  
もう奇跡のようなものに思うから。

そして、映画としては、個々の物語を軸に、  
ラストはふわっと泣けてしまう。

それは予定調和的なものだけれど、  
そういうほうが心地いいと思う展開だ。

帰国した空港でヒーロー扱いされるのかと思いきや、  
されずに、それぞれの大切な人に歩み寄るシーンがある。

それが、地味だけど、すごくいいなと思う。

それぞれのわけの中に、

ほんとうがあるような気がして。

コメディタッチだけれど、ほろっとくる。  
そして、実話テイスト。さらに、オリンピック。

好きな要素の詰まった作品でした。

## となり町戦争（2006/日本）

---



監督：渡辺謙作

出演：江口洋介.原田知世.瑛太.菅田俊.飯田孝男.余貴美子.岩松了.小林麻子

シュールで不条理な設定で話題を呼んだ三崎亜記のベストセラー小説を映画化した新感覚サバイバルサスペンス。突然となりの森見町との戦争が勃発した舞坂町。偵察業務に就かされた“僕”は、森見町戦争推進室の“香西さん”と夫婦生活を始める。（「キネマ旬報社データベースより」）

前にも同じことを書いたけれど、  
サッカー元日本代表監督、イビチャ・オシムの言葉を思い出す。

「戦争から学んだことがあるかと聞かれて、あると答えてしまえば、  
戦争が必要なものになってしまう」

戦争を「体罰」なり「虐待」、あるいは「自殺」に置き換えても同じことが言えると思う。

起こってしまったことと、  
起こしてしまうことは、まるで意味が違う。

学ばないから起こる戦争は、  
ただ、ただ、せつない。

それは、たくさんの感情がなくなってしまう、せつなさ。

そんなせつなさは、いらぬ。

## 武士の家計簿（2010/日本）

---



監督：森田芳光

出演：堺雅人 仲間由紀恵 松坂慶子 中村雅俊 草笛光子

磯田道史原作「武士の家計簿『加賀藩御算用者』の幕末維新」を映画化。代々、加賀藩の御算用者(経理係)である武士の猪山直之は、腕を磨き出世するも、その度に出費が増えて家計が火の車に。一家の窮地に直之は“家計立て直し計画”を宣言し、家族一丸となって節約生活を実行していく。つつましくも堅実に生きた猪山家三世代にわたる親子の絆と家族愛を描く。（「Oricon」データベースより）

僕の携帯はau iidaの「G11」という機種なのだけど、これがものすごく気に入っている。

ipod touchもあるし、スマートフォンはいいやーって感じなので、しばらくこのお気に入りを使い続けるつもり。

スライド型の携帯なのだけど、開閉のときに、刀を抜いたり戻したりする効果音がないかと探している。

携帯を開閉するたびに侍のような気分になれそうで。

けれど、刀ではなく、そろばんの音でも、侍になれるのかもしれない。「武士の家計簿」を観たら、そんな気持ちにもなった。

男はくだらない生きもので、体面や面子にこだわるような人が多い。

肩書き、身分、「人」ではなくそれによって、体裁を保ちたがることも、よくある。

江戸末期から維新の激動の時代の中で、“算盤ざむらい”は、体面にこだわることなく、自分を貫き通した。

自分にとって守るべきもの、それがまざれもなく、家族であったからだ。

大切なものを守るすべ、それは刀ではなく、算盤なのだ。

戦国時代の武将が持て囃されて、たとえば「信長に学ぶ経営術」とか、「家康の部下の操縦術」とか、

そんな本なり番組が作られたりする。

そのたび僕はまず何を思うかと言えば、  
でも武将って殺し合いをしてのし上がったんだよなあってことだ。

その時代はそれを許されているともいえる。  
今にたとえれば、政治の権力争いのようなものなのかもしれない。  
それをわかったうえでもあるのだけれど、  
やっぱり、それでも「尊敬する」とは言いたくないのだ。

だって、人を殺しているんだもの。  
それをよしとして、行動しているんだもの。

それよりもっと、大切なのは、  
やっぱり自分にとっての「盾」を持ち、  
本当に大切なものを守りぬこうとする、  
彼のような”サムライ”に気持ちが揺さぶられる。

武将や殿さまのような、  
大きな何かを動かす力はないし、  
ドラマチックな展開もない。

それでも淡々と、優しい日常を続けるための毎日を送っている。

それってすごく、カッコいいことなんだよなあと、思うのだ。

時代は江戸末期だけど、  
今と変わらない家族の物語が、ここにはあった。

あ、どうでもいいですが。  
今のメール着信音は「マックのポテトがあがるの報せるときの音」です。

## かいじゅうたちのいるところ (2009/アメリカ)

---



監督:スパイク・ジョーンズ

出演:マックス・レコーズ キャサリン・キーナー マーク・ラファロ ジェームズ・ガンドルフィーニ ローレン・アンブローズ

モーリス・センダック原作による世界的ロングセラーの絵本を、「マルコヴィッチの穴」の奇才スパイク・ジョーンズ監督が映画化!少年とかいじゅうたちが繰り広げるファンタジー・アドベンチャー・ムービー!

最近「まっさらな状態」になりたいと思ってしまう。  
死ぬとか生きるとか、そういうことじゃなくて、  
ただ、「まっさら」に、気持ちを放ってあげたくなる。

自分の世界じゃなくて、  
自分より大切なもののほうが、  
世界に必要なだと、切に思う。

そうして、胸が苦しくなる。

「孤独をなくすことはできるのか」

「悲しみバリアで、やっつける」

もし、こんな会話を、  
本当に大切な存在の人とできたのなら、  
孤独なんていうのを恐れない。

たとえば、家族。  
あるいは、家族になりたいと思う存在。

人は誰も、自分とは違う個体で、  
考えることも、感じることも、完全な共有をすることはできない。

だからうまくいなくて当たり前で、  
うまくいっている時間は、「普通」ではなくて、  
「奇跡」の連続なのだ。

そう思えたなら、やり直せることがいくつもある。

始められることも、いくつもある。

心の中の怪獣は、  
大人になっても生きていて、  
それが世界を、鮮やかにしている。

## きつねと私の12ヶ月（2007/フランス）

---



監督：リュック・ジャケ

出演：ベルティエユ・ノエル=ブリュノー イゼベル・カレ トマ・ラリベルトウ

制作：リュック・ジャケ エリック・ロニヤール

『皇帝ペンギン』のリュック・ジャケが贈るファミリードラマ。フランス・アルプス地方。学校の帰り道に1匹のきつねに出会ったリラは、一瞬にして彼の虜となってしまう。それからというもの、彼女は彼に会いたい一心で毎日森を訪れるようになるが...。  
（「キネマ旬報社」データベースより）

”『好き』と『所有する』は、違う”

「好き」という気持ちは、まっすぐだ。

子供心ならなおさらに、  
「好き」だけで、進んでいける世界がある。

「怖さ」だって乗り越えてしまえるほどに、  
まっすぐに、それは続いている気持ちだ。

キツネと仲良くなりたいリラは、  
「星の王子さま」にあったキツネの話のように、  
徐々に距離を近づけて、絆を作っていく。

けれど、大人だって間違うように、  
子供のリラも、「好き」という気持ちを間違ってしまうのだ。

「相手も自分のことが好き」というのは、  
「相手を思い通りにできる」ということではない。

その錯覚に陥ることが、つまり「所有する」ってこと。

所有していると思うから、  
思い通りにならないことに傷つくわけだけど、  
本当に傷ついているのは、相手のほうだ、ということ。

その深みにはまってしまったとき、



まっすぐに「好き」だった絆は、いとも簡単に離れていく。

それは、淋しいことだけれど、  
「離れる」ということが、傷の手当てになるのなら、  
きっと、それも「まっすぐに好き」ということの一部なのかもしれない。

そうやって、少しずつ、大人になる。

そんな気がしている。

## 映画カルテ

<http://p.booklog.jp/book/65974>

著者：ゆひ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuhibook/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65974>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65974>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ